

# 川柳雜誌

麻生路郎主宰

第十一卷

第五號



# 川柳雜誌 第十一卷第五號 目次

題字 藤生路郎  
表紙圖 大西長三郎

## 文苑

## 創作

川柳鮮満ところぐ 麻生路郎(三)

近作柳樽 麻生路郎選(一〇)

人と藝術 川村花菱(二)

川柳塔 麻生路郎選(四三)

武玉川二篇研究 梅本秋の屋 森東魚(五) 蛭子省二

粒々集 柳秀鞍馬(四九)

麻生路郎先生鮮満川柳行脚歡迎會 (五)

袂の塵 前田雀郎捌(六)

一路集 猫袴 西田艸樂選(五九) 西村山月共選(六〇) 竹内機女

連句前奏曲 住田亂耽(三)

夜櫻と動物句會 艸樂記(六六)

評母の眼 福田山雨樓(四)

各地柳壇 路郎、綠雨(七) 二南、整理(七)

リタ嬢について 林佐市(五〇)

川柳書架 (四)

古狸窟雜筆 梅本塵山(五三)

川柳家戶籍調 係・山雨樓(五九)

山本寒子をしのぶ 石森靜太(六六)

西之町MEMO 綠雨(三三)

川柳パイロット欄 福田山雨樓(六四)

編輯の窓 山雨樓(七六)

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髓腦

# ドーマポ椿豆伊

精の椿島大 一唯産國

輝く美髪



伊豆椿香油本舗

いさ下用愛御に直今  
りあに店藥品粧化名有國全



# 人と藝術

川柳と俳句についての一考察

川村花菱

つく／＼口惜しいと思ふ事がある。しみ／＼残念だと思ふ事がある。茲に云はふとする事は、柳樽にも武玉川にも句主の名前が無い事だ。

何故そんな事を考へるか、それについていさ／＼か自分の考へを申上げて見たいと思ふ。

古池や蛙飛び込む水の音

と丈あつてもし此の作句者の名が無かつたら、此の句を禪味なりとし、あるひは平凡なものであるとして、甲乙互に論じ合ふ事があるだらうか。

一つづゝ蛙を仕舞ふ水の音

柳樽に此の句があるが、これこそ、芭蕉の「古池や」の句を川柳式に表現したもので、パロディーとしての興味丈は感じるがそれ以外に、此の句独自の價值について論ずるものは一人もなると云ふ事も出来る。

芭蕉の句、一茶の句、蕪村の句、そこに名句もあらうが駄句もある。然しそれ／＼の俳人が詠み來つた數千數萬の句を、一とまとめにして考へる時に、批評家は必らずその俳人と俳句とを同時に考へて居るのである。作者を離れてその句丈を考へる事をしない所に、俳聖芭蕉の評論があり、一茶蕪村の評價が出来るのである。

俳人そのものゝ人物、性行、逸話、即ちその人それ／＼の生活全體を考へて見るところに、單なる十七字詩がその背景の力に由つて、更により多くのねうちを持つて考へられ十七字のよさ、うまさ、引いてその俳人の人格をも引上げたところもある。

人と藝術の問題が、俳句程密接に考へられ論じられるものは尠い。

俳人が行脚する場合、その句とその俳人の性行人物にあくが

れるものは、さながら名僧の來たやうにこれをむかへ、これに會ひ、これと語る事を、精神生活の上にとれ丈多くの歡びを感じるか分らないのであるが、句丈残して名を残さなかつた川柳詩人——柳樽の投句者が行脚したとしたら、恐らく一市井の皮肉屋が來た位に考へて、これに慕ひ寄るものがはたして幾人あつたであらうか。

柳樽の句主、武玉川の句主には、必ず幾多の俳人に倣るべき人々があつたにちがひない。

何故柳樽の句主、武玉川の句主は、自己の名を表はす事をさけたのかと、私は残念に思ふものである。が、そこに又川柳詩人の心境をもうかゞひつくす所もある。

川柳詩人が一つの洒落者であつた所にも、自分の名を賣らうとする事を避けたのであらう、あまりに平俗な詩形は、素人にも川柳がよめ、いやになればすぐ止めると云ふ、江戸者の獨特な氣があるが、遂に川柳を一つの心のなぐさみに終始したと云ふ點もあらう。

ねばりづよさ、やりとげなければ止さないと云ふ辛抱強さの缺乏が俳句に比べて川柳の弱さであるとも考へられる。

無責任な放言に等しい人生批評に對して、特に名を秘したと云ふ心持もあつたのかも知れない。

いづれにしても、川柳が、人と藝術の問題から離れて残つたと云ふ所に、作品そのものゝ價值が非常に低く考へられるうらみがある。

「傳湯淺又兵衛」と云ふよりも、明かに作者が知れて居る畫の方が、一般大衆には安心され信仰されるやうに、あの人の句かあの句をよんだ人はあの人かと、作と人とを並べ考へる所に、その句が更に味はれ、その人が更にしたはれる事は事實である。柳樽に連なる多くの句の中には、あるひは此の句は此の句を作つた人の句ではあるまいかと考へられるものがある。人生に對する見方、考へ方、そこに同じ態度と同じ焦點とをねらつて居るものを見出す事がある。

一ツの名句に對する作者への信頼は、他の平凡な句に對しても、一ツの信頼と親切とを持つて研究しようとする。此の句のよめる人ならと、更に同じ句主の句をさがしたづねる心持もある。

川柳が人と藝術を離れて考へられなかつたとしたら、今日まで幾多の川柳詩人の評傳が残り、そこに人生批評家としての詩人の生命は永久に生きて行かれたらう。

詩か人か、人か藝術かを考へる時に、私は先づ、作品よりもその人を多く考へ深くながめやうとする。藝術はその作者の人の問題だと考へる。

作品のみ残されて、その人の知れないと云ふ事が、川柳を一般から軽く見すごされた所以である。

作者に對する信頼は、その作者の試みに對して、吾々は厚意と親切とを以つて對して行く。無名の作者が同じ試みをなした場合、吾々はそれを何と考へるか。

書に落款があつて、はじめてそれが完成した作品であるやうに、俳句の下に句主の名があつて、はじめてその句が獨立する。川柳に句主があつたら、柳樽武玉川に對する信頼は實に百倍の力があつたらうと思はれる。

よき句を作れ、しかして、作家は自己の名を公表する點に於て充分の責任を持ち、更に深く、更に高く大きく、自己の人間をさびき上げなければならぬと考へる。

川柳愛好者は、人を見、作を味ひ、更に一層の信仰をそこに持つ事が出来るだらう。

かりそめに、歌ひ残した、端唄小唄のそのやうに、川柳をよみすたと云ふ所に、川柳詩人そのものの意義があるのかも知れないが、反對に、そこに又川柳が俳句と同列の品格を保つて、後世に残らなかつたらうらみもある。

はたして、いづれが川柳として正しい道であつたであらうか私はこれをもつと考へて見たいと思ふ。

明治大正を通つて、川柳は最早や研究時代を過ぎて作品の時代に來て居るのではないかと思ふ。過渡期は過ぎて、現代川柳の完成に近づくべき秋に來て居るのではあるまいか。

川柳の水平運動は、幾多の人々に由つて、しばしば考へられ企てられた事であるが、作と人との問題について、川柳と俳句を並び考へられたものはないやうな心持がする。

私は昔の柳樽武玉川を讀む事丈知つて居て、これを研究する

道を知らない。その道の先輩が、もし柳樽武玉川から、その句主をたづねさがす事をしてくれたら、幾多の川柳詩人は、茲にはじめてよみがへり、川柳に對する一般の信仰は改めて強い大きなものになるのだと考へる。

此間、武玉川八篇の中から、十七字の川柳をさがして評釋して見ると三太郎に云はれて、私は又武玉川を讀んだ。

#### ○野暮と云ふ字が今よめて夢枕

と云ふ句にぶつかつて、私は胸をうたれた。涙が出て來た。何と云ふ奥床しい靜かな境地だらう。何と云ふ悟り切つた心、澄み渡つた人であらうと考へた。

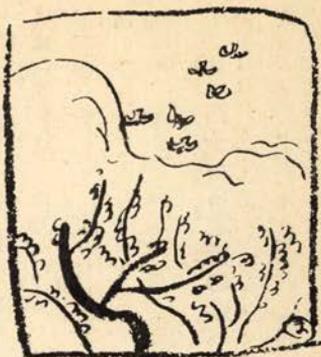
此の句に句主の名があつたら、私はこの句主の名を更にたづねて、もつと教へを乞ふ様になつたらう。

一つの作品に打たれた。私は同じ作家の作品を更に更に讀みあさつて、もつと深くその人の心を知らうとするだらう。

柳樽の句、武玉川の句、打たれても、驚いても、私は再びこの作者の胸にふれる道がないのを悲しむ。

現代の川柳詩人も、人と藝術の意義をもつと考へて、よき句を咏み、その句から吾々がその人をたづねさがすやうな心持にしてくれたら、川柳はもつとよくなつて行くのではあるまいか。

此の一文、全くある瞬間の感想に過ぎない。私は此の事をもつと考へて見やうと思ふ。



# 武玉川二篇研究 (一)

森 東 魚  
梅 本 秋 の 屋  
蛭 子 省 二

## 冬 嶺 の 篇

(1) あんばいのよい朔日の空

省 二 按排。朔日であつて感じが出る。又も初一步なのだから。

秋の屋 青天白日、心に懸る雲もない。

東 魚 一 お朝日だと云ふ氣分が、あんばいのよいと表はした處に、よく出てゐる。

(2) 陽炎やとかく何そに倦た時

省 二 倦怠を覺えた時、眼をそらせば陽炎がみえる。春の氣分だ。「とかく」がいきで居る。「陽炎や玄關硯の乾く時」(五柳)など思ひ出す。

秋の屋 讀書筆記などに倦み疲れた時、ふと庭先でも看ると、其處に陽炎が立つて居る。

東 魚 全く長閑な句である。

(3) 口洗ふ馬のくはへるかきつはた

省 二 作つた様な句ではあるが、事實なしとは言えぬから

「馬の飲側て一口かきつはた」(來川)など、類詠は尙有る。

秋の屋 左様です。少し作り過ぎのやうである。

東 魚 浅とも清き流なのであらう。

(4) 紙漉のたま／＼よめてかこち艸

省 二 かこち艸は俳諧式手法。紙片の文字が讀み得ては、かこち艸の種ともならう。江戸には處々の紙漉場があつたものだ。(早大運動場の向ふの畑の中にも在つて、見物にいつたりした)。

秋の屋 三谷あたりの浅草紙の漉場で、その材料にする反故の中から、手紙の切端を職工が見出し、而してかこち草にするのである。

東 魚 細かい處を捉へたものだと思ふ。

(5) 雜司谷駕から顔かニツ三ツ

省 二 雜司谷鬼子母神の繁昌の有様は、江戸名所圖會にも詳だ。「風の日は愛想のある雜司ヶ谷」、子供を連れての參詣が夥多しい。

秋の屋 これは奥女中の御代參で、二つ三つは帷葺鬘の顔で

あると思ふ。さう見た方が情趣がある。

東 魚 顔を出した駕が二三挺目に掛つたと云ふ意味なのだらうが、顔か二つ三つはチト巧くないと思ふ。場合は前二説何れにも考へられる。

(6) 親父か見ては濟ぬからかさ

秋の屋 息子か何處からか借りて来た傘に、朱漆の美代吉とでも書いてあつたらば、親父の眼の色は怪しく光るであらう。  
東 魚 親父以外には、内々見てもらい度い氣もあると云ふものだ。

省 二 母親なら心配もの。

(7) 去られてもさられても來た美しさ

秋の屋 小使組の妾におしい阿婆擦れで、海千山千のしたたか者である。  
東 魚 丙午かなどで、いつ迄も若く美しく見えるのに、あつたらなとのだと云ふ心持にもとれる。

省 二 悽い美しさだ。耽奇的に喜ばるるもの。

(8) 鯨の師匠の駒下駄て來

秋の屋 鯨の友でなくて師匠であるから、先づ年長者と思はれるが、駒下駄には深い意味はなからう。

東 魚 駒下駄は傳法肌の人物を暗示してゐるのであらうかと思ふ。

省 二 鯨の味覺を教えてくれた先輩。駒下駄で天候を示したのではなからうか。

(9) 四十から老曾の森へ飛んで行

秋の屋 四十歳を初老といふ故、四十雀は老曾の森へ飛行くといつた迄で、老曾の森は近江國蒲生郡にある。名所である。

東 魚 前句に因つては軽い洒落氣分が生きてくるであらうが、單にこれ丈ではチト淺い。

省 二 昔、四十雀と老曾の森の關係はと、問題にされた事もあつたが、四十と老の詞の係り合せ丈けであらう。

(10) さし上て見る縫紋の出來

省 二 出來をさし上げて眺める、その姿も亦興あるものだ  
秋の屋 これは女の所信である。

東 魚 縫紋の出來榮えを満足してゐる心持ちが、さし上げて見るに窺はれる。

(11) 眼藥をさして大事に起あかり

省 二 横になつてゐて藥をさす、しみる眼を閉ぢたまま、靜かに起上つて坐る。眼藥で「大事」がいさる。

秋の屋 徐々に起上る狀が、目にみゆるやうだ。昔の目藥といふものは多く塗り藥で、現今の如き點眼藥は、稀有であつたと思ふ。

東 魚 「大事に起きあがり」は巧い描寫である。つくづく短詩形に於て言葉の重大さを思ふ。

(12) 病上り工夫して居遊ひ所

省 二 病上りの徒然。「病上り遊びに出るも恩にかけ」(古句)

秋の屋 現代ならば温泉場、轉地療養といふ所ならむ。  
東 魚 「工夫してゐる」と大層らしく云つた處に、何にこだわりもなく病餘を靜養してゐる長閑さが表はれてゐる。

(13) 年忘何そ降のを待つて居

省 二 忘れずともよい手合ひ許りなのだに、雪をまつ。  
秋の屋 雪でもふれば、深川二軒茶屋か、向島の權三あたりで、更に飲直しといふ寸法である。

東 魚 雪でもきたら一日休んで、ゆつくり忘年會をやらうと云ふ腹である——との意ではないか。

(14) 隅田の渡ししの夕暮を骨

省 二 夕暮にながめみあかぬ隅田川は、「さそふ水あつて隅田を渡るなり」で、先きに不夜城がみえる。「骨」の一字千金。

秋の屋 此骨は頗る軟骨で、花魁の良をみると、直にぐにやぐとなる。

東 魚 二 「夕暮を骨」、働きある表現である。

(15) 物買て脊筋のゆかむ小侍

秋の屋 何か重量のある物を買ひ、それを片手に提げて行くので、自然に着物の脊筋がゆかむ。

東 魚 二 「背筋のゆかむ」が何となしに、小侍の貧弱な様子を能く描寫し得てゐる。

省 二 二 「小侍」にして包を成すわけ。

(16) 河竹の本のこゝろは女也

秋の屋 曇き河竹の流に身を沈めて、源平藤橘を手練手管であやなすけれども、やはり弱い女の身であるから、其本意は柔和であるといふのであらう。

東 魚 二 あやなされて来る客も氣の毒など——思ふ心が本來の性であるが、一々氣の毒がつてゐては商賣にならぬから、止むを得ないといふ心持。

省 二 二 内心如夜叉など云ふが、汝の名は女なりで、心の底にはやさしい情が宿る、だから心中もあるのだ。

(17) 赤子は膳を見てぬ正月

秋の屋 正月の祝儀の膳には、老弱男女が一同に並ぶけれども、また母の懷に抱かれをる嬰兒のみは、其處に看えぬといふならむ。

東 魚 二 皆と共に居並んで、赤子の分も高足の祝膳が据えられてある。其處に投げ座りこさせられてゐるか、寝かされてゐるか、兎も角も高い膳の蔭で御本人に見えぬと云ふのであらう

省 二 二 膳にと膳での相異により、前二説となる。

(18) 井戸堀の心覺へに蛙啼

東 魚 二 井戸を掘るべき位置を下見分に来て、一寸印の杭でも打つて行つたのが、愈々掘にかかると云ふので、重ねて来た場合、何でも蛙のガア／＼鳴いてゐた近所だつたぞ、といふ様な場合であらう。

省 二 二 心覺の場所に、蛙が啼て居る。

秋の屋 前説の如であると、「心覺えは」でなければならぬと思ふ。

東 魚 二 井戸堀の心覺えに對して蛙がなくとみて、「に」で宜ろしいと思ふ。

(19) 壹分くわへて内へ引く息

省 二 二 一分の御祝儀にありつくのは、遣手の當然な權利、貰へば、しほの目をして息を引くは、現金なもの。

秋の屋 兩手が寒がつて居る故、口になちよつと一分銀を銜へたが、餘り深呼吸をすると、それを落す虞れがあるから、内へ息を引くので、遣手の纏頭ではないと思ふ。

東 魚 二 翳間などに看だと云つて、一分箸で挟んでやる。貰ふ方は兩手をついて口で頂戴に及ぶと云ふ場合の様考へてゐた。

(20) 九ツは禿の消へる鏡の聲

省 二 二 九ツは十二時、鐘がなるから鐘四ツともいふ。禿の消えるのは當然。「夜見世は、六ツ時(六時)より四ツ時(十時)迄」としてあるが、夜見世の引四ツに限り四ツの鐘の時は引の拍子木を鳴らさず、只大門を鎖して潜口より出入させるに止め、九

ツの鐘を合圖として往に始めて四ツの拍子木を打ち、其歸りに直ぐ九ツ（即ち十二時）の拍子木をうつゆゑ、引四ツ鐘四ツと唱へて區別した（花街風俗志）。古句に「鐘の九ツ木の四ツを打つてくる」。

秋の屋 六樹園の「吉原十二時」の子時の條に「拍子木をうつ外四つに五丁目今大門をしめて九つ」といふ狂歌がある。

東 魚 前説につき。

### (21) 朝顔を粉にして 歩行男の子

省 二 いたづらな男の子だ。イヤ男の子は此位のいたづらは、あたりまえた。吾等もやつた事ではなからうか。——朝顔の句は古川柳を俳句夥しいが、此句などは珍らしい方だらう。

「朝顔を其子にやるな喰ふもの」(荷分)など身に泌みる。

秋の屋 朝顔を粉砕するは、如何にも男の子の悪戯らしい。

東 魚 面白い。恐らく作者實際に目撃しての作であらう。

### (22) 春寒く廻り人のない法輪寺

省 二 法輪寺の句は、武玉川にはかなり載つて居るから、茲には詳述を避ける。諺にもある如く京の名所で、「渡月橋の南に在り」都名所圖會卷四、拾遺都名所圖會卷三に詳しい。「此地古より櫻花かすくありて、彌生のさかりには都下の騷人ここに詣し」西行櫻は寺の南にある。原句の意味は判らう。十三詣と程し四月十三日智恵貫ひには、童女織るが如く賑ふ。此は歸るに當つて、振返れば智恵を失ふと言はる。

秋の屋 昔の十三詣は三月十三日であつた。先年私が嵐山の花見に行つた時、この群集を目撃した事がある。

東 魚 歳時記にも十三詣は三月十三日となつてゐる。日本年中行事大全、三月十三日の頃に「下嵯峨嵐山の麓にあり法輪寺と號、本尊虚空藏菩薩」云々。三月の群集に比して、春寒の頃は別して淋しいといふ心持ちであらう。

省 二 いかにも古は三月であつた。近時は四月に行はれる少し長いが新聞記事を記せば、我國三虚空藏の随一としてその名も高い嵯峨の法輪寺本尊虚空藏菩薩に子供から大人にならうとする變體の年、すなはち十三歳に、より壯健な體に、より賢明な頭に生れかはらんことを希うて、參詣する名高い十三詣りは、四月十三日を中心として嵐山の花が咲き誇る前後の日をえらび禮裝の父母に伴はれ、一家親戚に護られて肅々飄然として法輪寺の石階を上るのである。本尊菩薩の奇くもありがたき御本誓に續つて、智慧をいたさき、壯健な體をいたした人々の例は限りなき中にも文覺、明惠、空也、榮西、法然、日蓮の高僧が如何に篤き信仰を捧げしか、楠正成、前田利家、桂昌院、左甚五郎近くは伊藤博文公が如何に當本尊の加護を受けかはこの出來ない可愛い、お子達の賢明と壯健を願はざるはなき親達が美はしいこの十三まわりの風習を寶重せられんことを宜なりと言ふべきであらう。

### (23) 子を持妾觀音を引

秋の屋 吾が生むだ子の、無事息災を觀音に祈るの歎。「引」の意が不明。

東 魚 引は、最負にするといふと語弊があるが、一にも二にも觀音といふ風に有難がつて力を入れる意味合ひかと思ふ。子をもつてこそ大慈大悲の觀音をたのむので、子がなければ恐らく金銀を授け給ふ、大黒天などをより以上に信心したであらう。

省 二 子育觀音信仰。

### (24) 奥に娘の光るかさり屋

秋の屋 美貌の娘を店頭に出さず、奥の方に飾り物にして置くの歎。「かさり屋」は、飾りといはむ爲に、たゞ道具に使用し

たものらしい。

東 魚 店先から何かと、ピカ／＼した品々が飾つてあると思つたら、未だ奥には眩しい様な娘があると諧謔的に云つたのであらう。

省 二 評判娘。シヨツプ、ガールでも奥床しい。

(25) やもめからすに張のない風

秋の屋 媚鴉といふことは「遊仙窟」の中に有つたが、「張のない風」とは何とも判らぬ。

東 魚 やもめ鳥は單に鳥と云ふ意に同じなので、此啼聲のもの憂げなところから、さう云ふのだとの説がある。「張のない風」は朗かな晴れ／＼した所のない、陰鬱な風といふ位の意であらう。

省 二 嬌鳥同様、配偶のないカラスをいふ。やはりなんとなく淋しい思ひがする處から、下七が生れたのであらう。張合のない風。

(26) 切賃は金のなくなる始なり

秋の屋 切賃とは金銭の兩換賃のことで、偶々小判などを手に入れたが、それを小貨幣や錢に兩換すると、此内より切賃を差引かれるから、金の無くなる始めと云つたのである。

東 魚 お説の通りである。

省 二 切賃が金のなくなる始めだから、小ゼニとなつたが最後、お小使にどし／＼なくなる。

(27) 足て鼠をおとす萬歳

省 二 鼠を嫁ケ君といふ。萬歳が足でおどかす嫁ケ君、とても作り替え得よう。

秋の屋 新年の詞に、鼠を嫁が君といふのを、逆用して嫁を

鼠といつたのであるが、これは少し無理であると思ふ。

東 魚 嫁を逆に鼠といつたのだとは、少し不安である。前句に依て場合は想像せらるべきもので、實の鼠であらうと思ふ安宿に戻つた萬歳が、ゴソやる鼠を足でおどす、それは萬歳の所作が癖になつて居る足拍子だ。

省 二 私も本當の鼠と解してゐた。手を叩くところを足で脅かすのだ。

秋の屋 嫁を鼠といつたとするは、少し無理かもしれぬが、眞の鼠を足で脅かすならば、萬歳でなくても宜しからうと思ふ

(28) 藪入の田の近道をうち忘れ

省 二 句で藪入の親元が判かる。近道を忘れるなど、多少都會じみてきたわけ。

秋の屋 江戸近在の乳母の宿でもあらう歟。

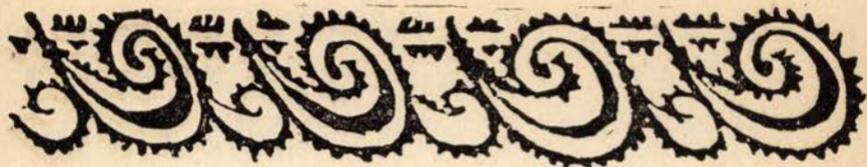
東 魚 畦を通る近道があつたが、暫く來ぬ内に忘れたといふので、實際畦道などは一つ間違つて入ると、却て遠廻りになつて始末にならぬ事がある。此句大變面白いと私は思ふ。

(29) うまい事言ふた師走に助ケ舟

省 二 此世は苦の海だなどと云ふ、殊に師走なら痛切だ。そこえ助ケ舟なれば、一ト息つけたであらう。

秋の屋 甘い言をいつた故に、師走に助舟が來たといふの歎師走に助舟とは、甘い言を云つたものだといふの歎。私は少し判明しないと思ふ。

東 魚 暮には多少纏つた金をやる様なうまい事を云つて置いたのが、それ處か、助ケ舟をよぶ有様だ、といふのか。或ばいい挨拶に助ケ舟がきて、ホツとしたと云ふのか、何れであらう。



# 近作柳樽

路郎選

旅に病んで添書汚してしまふなり  
叱られに行く扉の前で鉦かけ  
菓子出来て講習生の笑ひ合ひ

大阪

大門

旅

水の味もう大阪でないのなり  
雪が解けゆく歟の音鋤の音  
いちはやく春が匂つて来た馬小舎  
金貸がこの村へすんく入つてゆきぬ

長野

有爲郎

紫痴郎居の南洋魚

信州と知つてか沈む南洋魚  
お情けを投げる勇氣がなかりけり  
のどけさは行手を蛇が横ざれり  
年期まで三度茶漬のめしを食ひ

大阪

観月

同 同 同



うれしさを返事は合せ鏡なり  
 縄暖簾脚が四五本酔ふてゐる  
 地下鉄を出た鼻先へ春の埃  
 餅のかび削れば匂ふ故郷の風  
 子に數へられ笑へぬあばら骨  
 飯を食ふ早さも俺の貧乏性  
 足早やに行くと女教師の近視眼  
 食慾がないの親に叱られる  
 全快  
 食卓へみんな揃ふた箸の音  
 猫の子を捨てて行くのに寒い夜  
 氣の毒な話に膝を合せたり  
 中空へ繩の細さよ足場組む  
 働いた歸りちいさな戀をする  
 妻と出て櫻は空に咲いてゐる  
 變り難幸福そな人が買ひ  
 昇給が今年ありそに子が生れ  
 女房に惚れてる玄米茶の香

神戸

同人  
某人

鳥取

同人  
法泉子

大阪

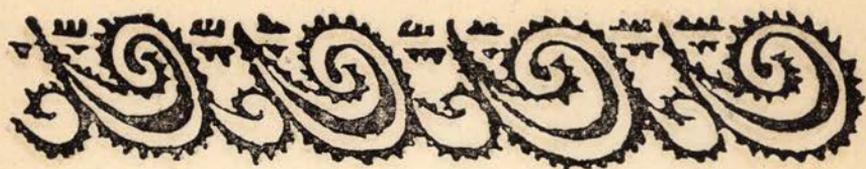
同人  
舟々

神戸

同人  
九葉

大阪

同人  
勝二



終點の朝生活がとがつてる  
 戀しきはポストの音をたしかめる  
 揚げ足を取つてる酒はうまくなし  
 恩給で食つて居りますラヂオ版  
 別れともないシグナルは青  
 偽りを包むにほろにがき酒よ  
 猪口を返して野心満々  
 勤勞が靴の底にも見えてゐる  
 伊達巻へざれついた三毛睨まれて  
 萬歳屋時代を知つて生きてゆく  
 あたゝかい言葉に胡坐かゝされる  
 友情にあまへきつてるラツバ飲み  
 ストープの温くさに歸る氣がほぐれ  
 背き去る心はつきりある鏡  
 金欲しき女と語るうつろさよ  
 行く春を別れて來れば落の臺  
 非常時の料理とやらを強ひられる  
 遠足が去つてみかんの赤い皮

松江

同 粹句樓

高知

同 同 映珠

大阪

同 同 清美

神戸

同 同 秋彦

今治

同 同 輝親

愛媛

同 同 國彦



よりそひて舞妓も見たり大文字  
 失戀へ肥えた女給の膝がふれ  
 花嫁も四十に近い落着きよう  
 掛引に老眼鏡の底光る  
 非常時に胡蝶バットを買ひ溜める  
 逆つて此頃父の涙ぐみ  
 言ひ切つた元氣へ睫毛濡れてゐる  
 日給を嘲る如くベルト廻ふ  
 書風呂に和尚の臍の大きかり  
 棧橋へチラリ藝者も泣きに來る  
 接吻の肩の向ふの午の海  
 失業の腹へ工場の子ついで  
 突刺せば血の出るような夜の花  
 春の宵乞食の垢が垢となる  
 送る子へ朝の微笑を残すなり  
 さびしい夜はあつちの方をむいてゐる  
 戀しさへ三錢切手の味覺なり  
 四十の戀はレザーに感謝する

今治

名古屋

高知

神戸

大阪

神戸

大阪

同 一郎

同 呂香

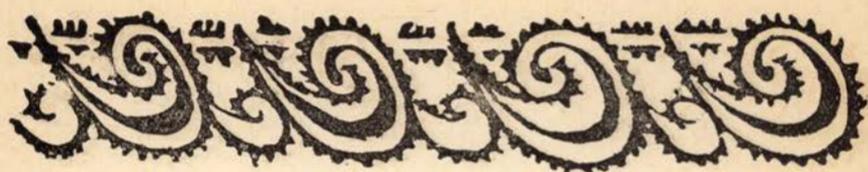
同 春水

同 港兒

同 町二

同 貧兒

同 利生



洋服もあぐらで飲める日本なり  
 虚心を衝いて光る佛像  
 娘の支度春蠶に當てゝ嫁るとしよう  
 失職の餘儀なく凝つて居る碁なり  
 てきばきと看護婦表情捨てゝ居る  
 物言へば寒月我に應へそう  
 舟べりにヒラメは尙も生きんとす  
 K 女 に (二句)  
 鉛筆の芯折れてゐる暮しです  
 うらみさへ湧くなり君は唄ひゐる  
 僕もいつしか番犬となつてゐる  
 されば神経質にもならう木の芽立  
 眼薬をさすま夕刊借りられる  
 看護婦の指を見つめてふと淋し  
 煙草の輪一度は失戀した女  
 行儀なく並ぶ子がゐる日向ぼこ  
 宜い娘持つて新築美まれ  
 社長室出てストロブへとりまかれ

愛媛 同 宵明  
 長野 同 柳兒  
 石川 一 飄  
 壺ヶ池 愚 寵  
 大坂 同 夜王  
 神戸 同 吉左右  
 東京 半 丸  
 愛媛 同 黙紅





ミラクルがあれと公園抜けて見る  
 副主任テリアのやうに構へてゐ  
 あくびをかみをさへたるひのさびし  
 明日米となる淋しい宵の鏡  
 一本氣頭をはつて見たうなり  
 弱い影まだ職業はみつからず  
 吐く息に嘘のつけない酒の酔ひ  
 隠岐丸よどつさり節で波をけれ  
 暗がりでも明りを探す田芋の芽  
 平凡に口あけてゐる妓の寝顔  
 溜息をつくに女の長火鉢  
 子が出来ぬことお互ひに不足云ひ  
 刻み吸うころとなりし三十二  
 お通夜した火鉢へ頭つきあたり  
 春の娘の人絹春の娘に似るよ  
 見送るも日課の一つにて嬉し  
 弟が死んだ日だつたとんぼとる  
 のれんから覗く表の砂ぼこり

壺ヶ池	同	大阪	神戸	愛媛	松江	同	同	大阪
同	巷巴	同	公子	同	ライト	同	徳三	同
同	孤鶴	同	榮吉	同	雀踊子	同	花涙	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同



戀をしてから天國を説くのなり  
 ゆううつのカケラに紙の櫻咲く  
 かさくさに唇かはく別れの日  
 淋しきよ鏡の傷をなでてみる  
 美しいこゝろ涙をにじませて  
 渡初生きた甲斐のある顔でゐる  
 見込まれた人が憎まれ役をする  
 二人来た女素直に負けてゐす  
 部屋一パイに兒の香満つ  
 口答へする兒の頬に春の風  
 犬連れて歩けば世辭の多い街  
 見くびつて咳二つしたサンルム  
 認識不足の中に僕と妻  
 ツモゴリの長飯を待つ店火鉢  
 二年ぶり鸚鵡は僕を忘れてる  
 理髮師の話題名士はねむいなり  
 鶯の死んで鳥籠空のまゝ  
 燒野原わらびばかりがさみしいぞ

松江 冷兒  
 今昔 一風  
 高知 同 珍景  
 同 同 梨生  
 愛媛 同 都留逸  
 泉州 同 華坊  
 京都 同 竹雅  
 大阪 同 萬雷  
 大阪 同 正夫



夜の底のしじまに心とぼしやな  
 空想の少さき胸に雲がとぶ  
 陽だまりに子供ら丸き紙芝居  
 傳法に女答へし春の宵  
 初夏の陽を射かえして行くお嬢さん  
 大道を歩む姿に成りなさい  
 冬の月俺はたしかに酔つてゐる  
 口説には女の顎が尖つてゐる  
 返盃の早さ多少の意地があり  
 眠くない夜が有り難い手内職  
 何氣たく馬鹿にもなれる世に馴れて  
 木枯が持つて来さうな警笛だ  
 故郷で唯物觀のうとまれる  
 逆境の叫び茶碗の底にする  
 案外な人の假装をのぞき込み  
 見てもらふさくら音頭の手が揃ひ  
 春が來たのに白粉がのびません  
 冷切つた心になつてノーチツブ

同 絹代  
 今昔 バット  
 神戸 朝雨  
 石川 酔羊  
 高知 青雨  
 鳥根 夢人  
 和歌山 一曉  
 大阪 たけを  
 松江 妙子  
 同



萬年筆のインキがもつた淋しさ  
火葬場は働いて居る春の風  
看護婦のポケット便り入れてゐる

療養所の夜

働く話はずんであとは黙りけり  
講義録頭のひくい父があり  
生れたを呪ふのでないちりあさり  
勅題に結つて見直す黒い髪  
巻舌が二度読み直す初句會  
おゑつする女の肩が尖つてる  
恩給が眞近くなつてちゞこまり  
争議の煙突春のまん中  
若草に叛く心の病んでゐる  
あんまさん鼻のしづくが落ちそうだ  
ふとうしろ向けば五月の山がある  
洋装の腰がはつきり目に残り  
洗濯の女給の顔にちさいあざ  
ベタル踏む春の一日は短くて

今治

蛇之助

野ヶ池

同 縷江

名古屋

同 錦之介

廣島

同 蛙庵

和歌山

同 玉兒

愛媛

同 滑秋

大阪

同 一沫

兵庫

同 天秋

長野

同 玲翠





健康の空腹なれば嬉しくて  
 断りのはなしを妻と灯によりて  
 朝食の不平も云つて病上り  
 失業は哀し風呂屋に五六町  
 賣る戀が夕陽へ顔を塗つて居る  
 娶る人ありて事務所の朗かさ  
 戀を得し今日の體をはかりたり  
 卒業まで嫁取りまでと祖父は生き  
 春近き窓少年の聲がする  
 職長と云へば頭にきづがある  
 テヤリーラのラストは獨り旅に立ち  
 大袈裟な西陣織の値段表  
 口笛ころく風にあふられて

殘業

お月様が窓へ氷りついて居る  
 好きなきな女の金齒が光る  
 インテリの八百屋馬鈴薯美しい

姉を亡くして

同	名古屋	松江	同	大坂	豊池	今治	大坂	石川	今治	京都	松江	名古屋	同	
寒草	三つ朗	紫映	清春	史郎	白葉	小松	一更	京雨寺	牧人	一一	あきら	白嘲	小樓	有魚



惜まれて惜まれて姉歸らない  
山口 狂路

僕は輜重兵特務兵

軍服を着ると肩身が狭いなり  
松阪 沃里

直ぐ脱げる靴で往診やつてくる  
藤ヶ池 春太夫

折靴廻轉焼と親しうなり  
大阪 天馬

浪花節一家養ふ聲になり  
松江 憲郎

柳友三枝ひろし氏空如三月二日逝去

そのかみの面影十七貫とは淋し  
京都 長一朗

大旦那鼻緒のゆるみット感じ  
名古屋 甲甲

人ごみにふと見上ぐれば青い空  
今治 伶人

郊外に鶏百羽の赤い屋根  
野戸 晃路

春浅く女としての寝白粉  
京都 貴代志

朝の風呂人生観を話してる  
空城 南葉

懐中の淋しさ母も知ってはる  
大阪 阿古

嫁ぐのか知ら看護婦をやめてる  
京都 師走

秀才と言はれて見たい本を持ち  
大阪 滑床

女客下駄をはいてもまだしやべり  
同 石流子

お互ひにつかまへた氣で許婚者  
同 一羊





外交員らしい靴が晝の寄席  
 よひどれへ救世軍の高い聲  
 險惡な空気を御茶がなだめにき  
 馬鹿らしいお叩頭が出来て昇給だ  
 宵寝の戸そろり／＼と締めまする  
 誰にでも金貸す様なビラが来る  
 失業で犬を手放なす朝のもや  
 張紙を見れば女の職ばかり  
 大吉の御籤尤もらしく見る  
 われにかへつて腹の底から潔し  
 正直をほめられて来た五十年  
 寝て居れば子供に顔を叩かれる  
 團服の努めやう／＼板につき  
 編みものを出すと電車はよく走り  
 公休の日記ほんとのことでなし  
 逝く春のひとりぼっちへ雨となり  
 醫者に聞けば醫者程粕はないといふ  
 店火鉢ませた小僧の大胡坐

大阪 小三  
 同 丹生  
 高知 藝花園  
 松江 正元  
 京都 白英  
 大阪 彩泡  
 同 さとし  
 同 遊人  
 〃吉原 西村  
 富山 照坊主  
 神戸 三思樓  
 廣島 承春  
 大阪 良吉  
 同 幽堂  
 同 元山  
 兵庫 虚心  
 大阪 愚堂  
 奈良 柳忠改ノ葉魚



向き合へばたゞ溜息の續く宵  
 人だかりばけつさげたり番ひ犬  
 大學をパスして母は燈明上げ  
 國寶となつて小壺は撮される  
 係累の無いのも戀へ打明けける  
 出世する事を見過して嫁にやり  
 氣まぐれな口笛で來る出前持  
 君街は三月きみは十九にて  
 サイレンの響寢返り一つ打ち  
 大掃除人夫に會釋する女將  
 夏祭り稽古の太鼓二時を聴き  
 三度目の見合ひ仲人に顔を立て  
 肩凝りを齒醫者平氣で抜くといひ  
 衰姿姑しい雨の嵐山  
 涙涸れて遊女見てゐる紺の空  
 運轉手偶に彼の世の人も乗せ  
 桃割れの女中案外やかへし  
 明日の夜は嫁ぎ行く身を涼臺

大版 泉流  
 同 トミヤ  
 同 美和  
 同 愛子  
 今昔 健二  
 大版 白蝶  
 金澤 綠水  
 翠ヶ丘 梟人  
 肥州 花洞  
 大版 笛秀  
 同 良之佑  
 同 久之子  
 同 三生  
 同 ゆきを  
 同 良夜  
 同 秋路  
 同 五朗  
 同 豊



# 川柳 鮮満ところぐ

麻生路郎

連絡船徳壽丸で三月十日午前七時半釜山着

八時上陸、直ちに東萊温泉へ

東萊温泉の湯槽で、蛙のやうに兩脚を投げ出した私は落人に似た軽い溜息をした。玻璃戸越しに眼に迫るもの蒼い空と白い雲。

東萊は一時預けで來てる客  
東萊へ來て拐帶の一夜明け

午後釜山見物—夜行で京城へ

靴の底が傷むほど釜山の街をてくついたが、あまりに内地化してゐるのが物足らなかつた。一瞥の釜山は小樽の街にそっくりだ。その人口が、その商店街が、市街の中央にある一丘陵龍頭山が、そこから瞰下した港の風光が——。

南濱で往きすり合つた妓にはじめて植民地の匂ひを感じた。濱邊に沿うて鮮人の出し店も長閑だ。鮮人の日向ぼっこ、鮮人香具師の人寄せ、みちばたで蒸し芋を賣る媼、腐りゆく彼等の生活。

思つたほどに寒くはない。昭和公園をよこぎつて、ま晝の緞町をのぞく。

龍頭山内地を向けば涙する  
龍頭山船は内地をさしてゆく  
釜山釜山君も九州訛りなり  
鮮人のあすをおもはぬひなたぼこ  
縁町泣いて来たのもゐるだらう

十一日午前八時二十五分京到着、言也・麗月冠  
大口坊諸君の出迎えをうけ、朝鮮ホテルに入る  
柳達寺、言也兩君の案内で新聞社歴訪、市中見物

京城の土を舂んで南大門はうれしいもの一つ。これを廣  
告塔に利用せざる京城をゆかしく思ふ。

京城の内の屋根看板の文字は巧拙二様の懸隔があまりに甚  
だしい。巧いのは莫迦に巧くて拙いのは莫迦に拙い。巧いのは  
鮮人の筆になり、拙いのは内地人の筆になるものらしい。  
詳しくは知らない。

李王家所管の昌慶苑は静寂そのものだ。苑内に風呂屋のや  
うな、幼稚園のやうな喫茶店のあるのもうれしい。

朝鮮ホテルで落合ふ約の春元紀太君が奉天  
よりの歸途、午後九時二十五分で來城

十時を少々過ぎてはゐるが、まだ眠るのには早いやうな氣

がした。妓生を見せるといふ紀太君と一緒に雨具もなし  
に雨の街へ出た。自動車を拾ふつもりが、呼びとめてもく  
駄目だった。二人は霞まじりの雨に煙をうたせながら繁華街  
へと足を向けた。旅なればこそである。  
妓生を斷念して雨に濡れた外套の背をカフエーのストーヴ  
に向けた。

十二日の午後、紀太君と朝鮮料理の  
明月館へ

明月館の晝は静だった。大きいことは大きい温泉水の宿  
屋でぶつつかるガラソとした感じだった。部屋天井は高か  
つた。紀太君が飛びあがつて帽子をかけた。それほど高いと  
ころに帽掛けがあつた。部屋には内地のやうに床の間がな  
い。入口以外の三方が屏風を揚げたやうな襖だ。いろんな繪  
や文字が書いてある。ゆかは油團が敷かれ、その下がオン  
ドルになつてゐる。疊一疊敷位のお雛さんの敷物みたいなもの  
が鈎の手に二つ置かれ、その一方の上には襖に接して、上半  
身をもたせかける大瓦型のもたれがあつて、その兩脇に四角  
な枕の如きものがある。これが内地の脇息にあたるわけだ。  
何れもドンスでつくられてゐる。これが主賓の席だ。家族で  
あれば家長の席だ。

右の外に下座には坐布團が敷かれてある。料理は十五六種



寺建柳木正・幹主那路・也言本橋りよてつ向  
(影攝社院新鮮朝日一十月三) 君謀の翌月九田津

てに城京

一度に出たが朝鮮獨特の味のものにはホンの僅しかない。刺身がト鉢あつたが、これなどは料理が内地人向きに轉向しつ

ゝあることを示すものであらう。  
曾て仁川の故矢田冷刀君が柳誌の名にしてゐた神仙爐なるものも出た。

×

次ぎくと酒が運ばれた。

私は内地の酒より、朝鮮の藥酒を選んだ。たとへ僅かの時間でも、地に親しみを加へたいからであつた。妓生たちも酌すまゝにうけた。

金月色は清楚端麗の妓生だつた。俗悪さが微塵もなく、確かに一流の名を羞かしめない。姜花仙も美しかつたには違ひないが、金月色とくらべては梅と桃の差があつた。金月色の特技は内地歌だつたが私は彼の女の内地歌を聞かうとはしなかつた。

簡單な朝鮮語を彼の女から教はつた。私は「累卵の遊び」の扉へ、ナリスン、タンシニスル、サラン、ハムニダー(妾はあなたを愛します)と朝鮮文字で書いてくれと云つた。彼の女は一寸はにかんだが、こゝろよくそれを果した。姜花仙にも書けと云つたら、二人も愛する譯には行かぬからと昭和九年三月十二日明月館記念姜花仙と署名してくれた。彼の女は同じ文句を要求したやうに誤解したらしかつた。斯うした考へ方がいかにも素人臭く感じられた。そして内地の古い型

の婦人と同じやうな道徳律をもつてゐることを知つた。

大奴へ遊びに来ないかと云つたら、姜花仙は何かの宣傳にでも使ふのかと訊いてゐた。さうぢやない、お友達として来ないかといふ意味だと云つたら黙つてしまつた。金月色は來るとも来ないとも云はなかつた。なんだか座敷がしんみりとしてしまつた。

X

私の歓迎句會が京城驛前、共立無盡の樓上で四温吟社主催朝鮮新聞社後援の下に開かれた。仁川からも出席者があつた。(別冊會報参照)

會場の中央、縦列に二尺四方位な角の大火鉢が据えられ、炭火が地間のやうに赤々と燃えてゐる。關西では見られない句會風だ。柳人の一人々々が非常に緊張した面持ちで句會に臨んでゐた。

私自身も疲れを忘れて柳談を續けた。主客共に感激、句會は盛會に終つた。春元紀太君は時間の都合上散會と共に歸阪の途につき、私は花月での歓迎招宴に臨んだ。

南大門夜行の人も通り抜け

李王家を偲びて

昌慶苑櫻もすぐに散るものよ

妓生

内地歌よりうれしきは君が立膝

朝鮮ホテルにて

寢返へれば朝日のあたる總督府

十三日午前八時京城發平壤に向ふ

今、十二時十分前だ。汽車が汗浦といふ小驛を過ぎる。ところだ。

車窓から見る外は雪で眞ッ白だ。天氣は非常にいゝ。太陽は輝いてゐる。僕の周圍は鮮人ばかりだ。

私の席のすぐ前に、口をあけて眠りこけてゐる四十恰好の鮮人がゐる。相當の服装はしてゐるが、前腕に金春澤と文身をしてゐる。彼氏おもむろに心き直つて汽車辨をばくつきはじめた。私は黙つてそれを眺めてゐた。食事が濟むと大げさに楊子を使つてゐる。食後の果物を僕が提供すると、彼氏ぼつ／＼いろいろな話をはじめた。彼金春澤は自ら語るところによると平壤座の興行主で、京城へ鮮人の役者を買ひに行つたんだとのこと。さう聞けば向ふの方の席に女優たちを交じへた一行が乗り込んでゐる。

私が大阪を發つ前に、新世界で金龜十一行の日滿提携喜劇をのぞいて來たことを話したら、彼氏は大きくうなづいて、金龜子なら知つてゐる。あれは天勝の弟子で相當のところまで行つたのだが、今は別れてしまつたのだと談してゐた。赤玉で娘々祭を見て來たことも談した。

興行といふやつがなか／＼あたりませんのでなアと獨言のやうに云つて彼氏はそろ／＼の上詰まではじめた。自分には妻子と妾とあるが、罪ですな。どつちも冷めたくていけません。もう子どもが、バクチをうつなとか酒を飲むとか意見をしますので憂鬱ですわいと、金さん／＼か／＼の話好きだ。今日初日を出す積りが翌日になりました。平壤へ來たら見て行つて下さいといふ。僕も今日が初日なら觀て行つてもいいんだが今夜の夜行で安東へ行くつもりだと談してゐるうちに平壤についた。

午後二時五十二分平壤着 野田錦魚君等の

出迎へをうけ牡丹臺や市中見物

平壤は朝鮮の京都だと云はれてゐる。飲むにいとところだと云はれてゐる。こゝは妓生學校の所在地だ。

牡丹臺への道は雪が氷になつてゐる。自動車を牧の茶屋のところまで乗り捨てた。牡丹臺は日清戦役の傷痕を見せて旅人の心を奪ふ。原田重吉の玄武門は出張寫眞屋のスタヂオ代用と云つた彫だ。

見物のついでに博物館を見せつけて貰つた。なかに大したものではありませんと錦魚君が頭から否定してしまふ。なるほど大したものではないが、木樫陣は古墳の内部構造を見せたもので私には珍らしかつた。

×

夜は歓迎句宴。人数こそ少かつたが、鎮南浦からの出席者を見たのはうれしき極み。句作に柳談に酒盃に興趣湧く。こゝは若い人々よりは春魁、可敷と云つた老人側の熱が高さうだ。錦魚、柳也、夢月の諸君等に一層の奮起を期待したい。十一時ごろ散會。

私の豫定表には平壤出發が午前二時四十分になつてゐる。それまでの時間をすゝめられるまゝに春魁老のお宅へお邪魔した。再び酒盃を手にして柳談に耽つた。語るにつれて春魁老は老でなく、熱の人春魁なるを知つた。深更雪のちらつく中を辭した。

大同江あんなところに煙突が

大同江濯ぐ女が景になり

牡丹臺學校からも來るところ

十四日午前七時安東着、濱屋旅館に入

り窓外に高脚踊を觀る

無理解な警察人になやまされながら列車は鴨綠江を渡る。流す筏の情緒も何もあつたものではない。漸くにして警察人の手を放れたら今度は坤關史によつて煩はされた。驛の構外では變な宿屋のポーターにつかまつて、汚ならしい老老支那人の俵に乗せられた。宿は驛の極く近くとばかり思つてゐた。

ら、かなり離れたところにあつた。朝湯にお這入りになつてお食事をなされたら如何でございますと云はれたので、それもさうかとワツカリ乗つてしまつたのだ。さて宿へ着いて二階の部屋へ通るとストーヴすら火を入れてゐない。女中がそろ／＼ストーヴの準備をはじめ出した。朝湯どころの騒ぎではない。いささかムツとしたが何も経験だ、辛棒々々ところりと横になつた。ところが窓外で賑やかな噂しの音が聞えるチンドン屋かしらと思ひながら、二重になつてゐる硝子戸を開けて首を突き出して見ると、顔を彩どり異様な扮装を凝らした婦人達が細腰弱々しく細長い脚の上に乗つてあちらへ寄つたり、こちらへ寄つたり、街を練り歩いてゐる。それを眺める見物人が、背後から兩横からぞろ／＼とくつついて行く態が如何にも奇異に感じられた。女中に聞けば高脚踊ですと答へた。なるほど、これが高脚踊か。こんな宿屋に連れこまれてゐたばかりに、巧く高脚踊が見られたとは何か幸福か、世の中のことは凡俗の豫測をゆるさないわけだ。

茶草君の案内で市中見物、阿片小賣

所や××書館へ

馬車に乗せられ、寒い風を肌と感じながら、阿片窟へといそいだ。云うまでもなくそこは支那街だつた。細い汚らしい街に馬車をとどめて、阿片小賣所の看板のあるバラック建へ

這入つた。その家の二階の裏階段を降りて更に奥の家の二階に昇つた。部屋は横に長く幾間かに區劃されてゐた。いづれも内地のお花町のやうに赤毛氈が敷かれ、枕が二つづつ並べられてはあるが何となく陰惨な感じがした。殺されても判らないやうな一本奥の端の部屋に這入つた。そこには若くて美しい、しかし蒼白い顔をした女がゐた。彼の女は共に寢轉んで阿片吸いのサーピスをしてくるのである。私はかなり警戒をしながらも勇敢に阿片の吸引を試みた。パツパツと女の教へる方法で煙を吸つた。なるほどフイツとした陶氣分になる。私が會て病院の事務長時代に支那歸りの阿片中毒患者N氏が入院してゐたことを思ひ出した。彼氏の談すところによると、おそらく阿片を吸うた気分ほどころよいものはない。支那にある羽化登仙といふ文字は阿片を吸うた時の氣持ちを云ひ表したものだ。酒ではどんなにいゝ酒を飲んだところで羽化登仙の気分にはなれないとのことだつた。しかし私は羽化登仙の氣分を遮けて彼の女から運れた。

×

阿片窟を運れた私たちは××書館のドアを排して階上に昇つた。書館といふのは圖書館ではなくて内地の××樓にあたる娼家のことだ。その一室で七八人の支那婦人がドヤ／＼となだれ込んで來た。アレとコレと指させば他の女達は何等

不平さうな顔もしないでサツサと引きあげて行つた。まことに簡單に取引が出来た譯である。私たちは指さした女に伴はれて、其女の部屋に這入つた。部屋の中には彼の女の箆笥があり、違ひ棚があり、茶器があり、時計があり、ベッドがある。こゝで私たちは茶を啜りながら暫く談して歸つた。カーテンを引けばベツ　はかくれてしまふに懸けになつてゐた。彼の女は敷布やハンカチの洗物せんぶつを這入つて来た男に渡した。それ等の洗濯物は彼の女の負擔ふくださうな。彼の女たちは内地の斯うした種知しゆちの女よりも無智ではあらうが、それだけ素直で明かなんじやなからうかと思はれた。

×

夕べから滿洲飯店で私のために歡迎句宴ごんげいごばんが開かれた。十二三人の會合かいごうだつたが、二三の人々をのぞけば川柳せんりうに對する熱は稀薄しよはくのやうに見受けられた。この人達にとつて、川柳會せんりうかいは一緒に會食かいじきするために利用せられてゐる觀かんがあつた。幹事かんじの一人から、それは事實じじつです。何んか寄る機會かいごがないかと待ちうけてゐる人々が多くて、川柳せんりうそのものは近來きんらいあまり振ふるはないのですとのことだつた。折角せきかく來東らいとうされたのであるから、これを機會かいごとして大いにやらうぢやないかといふ一部の聲こゑもあつた。私も大いに將來しやうらいを期待きたいすることゝした。私は九時の夜行やこうに見送られて奉天ほうてんに向つた。

新義州素通りされる夢を見る  
安東で時計すられた事を知り  
阿片窟身の振り方を頼むやう

十五日午前六時奉天着、夜行の  
十一時四十分で新京へ

少しく早く着き過ぎたので奉天の朝は雪にふかふかと眠つてゐた。

江戸みつる君を公衆　話で呼び出したが、幾回かけても通じない。トランクを一時預けにして雪の街へ出た。煉瓦造の洋館が押し並んでゐる驛の中央の大通りが千代田通りだと判つたので、ぼつ／＼歩いて見た。雪が珍らしくつたのである。

オフィース街であるのと、二重戸になつてゐるので訊くことも出来ぬ。たつた一軒満人が出て来たので早速その男に訊いて見たが、我不明白と云つて、それつきりだ。まあ歩いてれば判るさと向ふへ／＼と出かけて行つた。大して風はないうが寒いことは朝早いせいもあるが非常なものだ。寒いといふよりは痛いと云つた方が適してゐる。耳が痛くて千裂れさうだ。中耳炎にでもなつたら大變だと思つて襟巻を顔から耳へぐる／＼巻いて、僅に眼ばかり出して歩くことにした。忠靈塔を越してまた向うへ行つた。遂々判つた。千代田通

の一等端だつた。硝子戸越しに店をのぞき込んで見た。事務机がならんでゐるばかりで誰もゐない。電話に出ない筈だ。叩いて見たがこれ又通じない。もう家さへ判ればいい。もう一度驛まで引返さう。そのうちに起きるだらう。こんなには早く来たのはこつちの勝手なんだから仕方がない。昨日安東で打電するひまがなかつたのだから、誰に尻の持つてゆきやうもない。

まあ、ポツ／＼のんきにやれと、ソロソロ満洲化して来た驛の食堂でコーヒを注文した。飲んで見てたいしたことはないと自分でうなづいた。職業意識といふものはおそろしいものだと思つた。それから朝の食事に移つた。食堂備付の新聞を一通り眼を通した。もうよからうと食堂から電話した。

「へエ、みつるだす。どこにゐてはりまんね」といふ大阪辯が聞えた。もう大丈夫だ。すぐにみつる君が来てくれた。

二人で鐵路總局や滿鐵用度や消費組合や大毎支局やヤマトホテルや堅いとこばかりを歴訪した。ヤマトホテルでは昨日来て今日もう立つといふ大連の大島濤明君に會ひに行つた。夕方になるとグツタリと疲れた。

喫茶店の青い鳥をのぞいた。これも職業意識だ。職業意識ばかり働かしてゐるのもいゝ加減される。

夜は權兵衛へ案内された。こゝは關東煮屋が大坂あたり

の關東煮屋とはいささか趣きが違つてゐた。

濤明君も昨夜はこゝへ來たんださうな。小座敷に柳人の短冊がかかつてゐる。私のもあつた。日本人はアメリカへ行つてお茶漬が喰べたくなる筈だ。僕はもうすき焼が喰べたくなつた。みつる君が「何か喰べたいものはおまへんか」と母親のやうに訊いてくれた。「僕はすき焼が喰べたい」とまるで赤ん坊や。云ひたいことをいふ。「そやあつたら」と權兵衛の女將に頼んで、すき焼をして貰う段取りになつたのだ。女將の部屋を片附けてくれてそこですき焼でお互の健康を祝福した。何よりの御馳走は女將が私の句をよく知つてゐたことだつた。「子澤山おれの枕はどこへいた」の句をほめてくれたのはうれしかつた。なんでもうれしくなつてくるころは赤ちやんの本領かも知れない。

うれしく飲んで、鐵路新京へ向つた。

みつる君に

君既に箸の長さになれしころ

十六日午前七時新京着、

滿洲屋旅館へ

新京は滿洲國の首都で中部滿洲の最大農産市場であり、附屬地其の他を合せて人口十五萬、内内地人が二萬とある。

そこへ國都建設局が出來て、人口五十萬を入れる市街地を

でつちあげることになり、廣つばといふ廣つばへ連も笠棒に大きな建造物を目白押しに押し並べる設計が出来上つてゐる既にその三分通りは實現したと云つてい

ふ袖のある大机を据え、そこへ一人の満洲人が悠然とかまえて込み、兩腕を伸ばして大曲公報といふ漢字新聞を靜かに眺めてゐる。

新京の宿にて

向つて右は館主幹、左は中野編者  
三月十七日 漢字新聞社にて撮影

。新京驛から國都建設局へ一直線にありつばなしの大道路が出来てゐる。私かこゝの處長を訪ねた時に銃剣を手にした衛兵が敬禮をして受付まで案内してくれた。



彼氏の前には書類入があるにはあるが、一通の書類すら這入つてゐない。國都建設局のお役人としてはあまりにも事務閑散に見える内地人なら欠伸の三四つもして他人の仕事の邪魔でもしにゆくと

建設局の天井の高さがある。内地と違つてあけつばなしの満洲である。この位高い天井でなければ釣合がとれないのであらう。私は處長の先客のちくのを待合はしてゐる間に、そのあたりを一瞥した。私の眼の先一間ばかりのところ、一間以上もあらうとい

眺めてゐる。右方の壁には天井までとどく大亜細亞地圖が貼られてあり左方の壁には飛行機上から見た塗つぶしの圖面が貼られてゐる。その外に何も無い。すべてスケールが大きい

處長に會つた時、この人の事を聞いてみたら、京大出の醫者ですとのことだつた。

建設局事務官の紹介で滿洲協和會の人たちにも會つた。滿洲人の風俗習慣、迷信などについて得るところがあつた。

×  
新京の支那伊、張氏二號邸なども見た。

×  
滿洲屋へ泊まれば柳陽君に會へるとばかり思つてゐた私は汗漉だつた。柳陽君は所用で、昨日奉天へ行かれたが、今日は戻られるでせうとのことだ。期せずして昨日は奉天で瀋明君も柳陽君と滞在してゐたわけだ。

×  
翌十七日の朝、柳陽君と食事を共にし、滿洲屋の玄關で記念撮影をした。それから八時四十分の哈爾濱行の列車に投じた。

車中の寢臺で虫を拾ふ

南京虫よこゝが、新京いふところ

午後二時十分ハルビン着、旅館鶴屋に投じ  
市中見物夜は立井登美坊君とその二令弟の  
案内で夜のハルビンを観る

新京、ハルビン間の汽車賃はペラ棒に高い。これが問題の東支鐵道だ。滿洲國へ高く賣りつけやうとしてゐるので現在とはとれる限り高くとるんださうだ。

私は列車ナムバーやカー、ナムバーやシート、ナムバーを見て、寢臺に乗つた。汽車が動き出す前に圖節の大きい露天車掌が来て私の切符を持つて行つてしまつた。一寸不安だつたが、考へて見ればそれでいゝ譯だ。私を哈爾濱まで運んでさへ呉れば切符なんか、どうでもいゝんだ。ホントは切符なんか無くてよいわけのものだ。途中で、この車掌さんが私の顔をジイワリと眺めて行つた。これが内地の檢札にあたるのだらう。時々着剣の兵士や護路軍の兵士が腰に拳銃を提げて車中を往來した。

哈爾濱へ着いた。切符は乗車した時既に渡してしまつたので收札の必要もない。従つて收札口もなければ改札口もない驛はあるが列車へは自由に乘れる。内地では見られない圖だ實に羨ましい制度だ。

登美坊君はハルビンはインチキの都だと云つた。トランクを自動車の運轉手が攫へるやうにして持つて行く。それにすぐ飛び乗つて行かぬと、荷物は消えてなくなるんださうな。インチキの都へすこぶる餘裕綽々たる汽車が着くんだから世の中は何處までも面白。

暮れゆく郊外、志士の碑は儼然と建つてゐる。沖、横川の血がハルビン在住日本人の體軀を流れて一分間も休まないことを知つた。偉なるかな。

### ハ爾賓驛フホームにて

露、支對照、入場者は各國人だ。私たちの外には日本人はなかつた。ハルビンには四十三種の間人がうよ／＼してゐるのだと聞かされた。その映畫館がハネてからキャバレー・フアンタージャーへ出かけた。

支那街と、その平康里(遊廓のこと)ロシヤ人街、日本人街ととり／＼の匂ひ、松花江の春待つ姿に旅人らしい哀愁を感じた。



向つて右は路部主幹 左は立井登美坊君 伊藤必清館の標旗を前に 三月十八日立井君合演撮影

異國情緒の豊かな實際都市ハルビンの夜は旅人の多くによかれ悪しかれ、忘れ得ぬ印象を鏤刻みつけるものらしい。猶太系露人經營のチヌーリン百貨店、名は知らないが露人經營の大衆的なレストラン、そのすぐ近くの映畫館、イングリツシユのオールトキーだつたがタイトルなどはすべて

は踊つては飲み、飲んで踊りして 歡樂の一夜を過ごすのだ。一時ごろにそこを出た私たちはロシヤ人の娼婦を見に行つた。薄暗い扉ばかりのやうな家の、いづれかある釘を探して

十時ごろからソロ／＼始まるので露人は明け方までも踊り抜くのさうだ。ステージダンスのプログラムを見ても十時頃から夜明近くまで踊ることがうなづかれる。ステージが一つ踊れば、必ず客とダンサーのダンスが二二回ある。周囲のテーブルにゐる人々

押すと扉が音もせず開いた。そこでオヴァや帽子を渡して更に次の一室へと流れ込んだ。そこにはロシヤの女性が七八人ゐて、頻りにウキシクを送つた。

大阪あたりでいふ二階廻りが、ひとりついてゐて交渉の衝にあたるのであるが、私はこの時、古川柳の

賣れ残りげに十目の見るところ

といふ句を思ひ浮べ、いかにも矢鋭な穿ちつぷりに思はず微苦笑を洩らしたのであつた。

×

酔つばらつて大きな聲を出すのは露西亞人と日本人で、支那人は酔つても決して高聲を發しないさうだ。その點支那人は感心だとのことだつた。何が彼氏をさうさせるのか、その原因が知りたい。

×

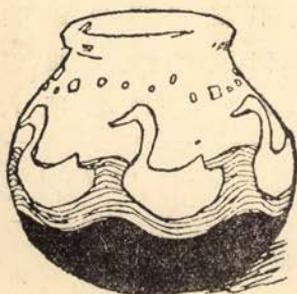
哈爾濱よさらば！

亡命に似て哈爾濱へこころざし

支那街のあれで金持とは見へず

スンガリー郷國を忘れた戀もする

(續く)



の

# 袂

## 前田雀郎

不朽洞 路 郎

君見給へ渡蓼草がのびてゐる

袂の塵をすてる春風

奥藏の網戸の中に咳をして

父のかたみの袴一腰

影法師に傾く月を思ひつゝ

しかと覚えす宿の貸下駄

傘さしてどこぞの祭見て歸り

連れてゐる子の掌の冷え

彌陀六のほくろ忘れて二十年

産れた土地の水呑んでゆく

夕ざれば街の軒々灯がともり

店へ来てゐる客の高聲

大弓の的を通して雨を知り

嘘つく人に雲を出る月

女房に櫻櫻とうたはれて

箏笥の音も寒い極月

末席に他人大きく座を構へ

祝ひ日近く重箱を拭く  
行商の目端は利かず夕まぐれ

自 樂 人

玉 兔 朗

亂 耽 郎

雀 郎

玉 郎

雀 郎

不 倒 人

雀 郎

玉 郎

亂 耽 郎

不 倒 人

雀 郎

自 樂 人

亂 耽 郎

自 樂 人

不 倒 人

玉 郎

連句前奏曲

雨に濡れたネオンの街をはるかに見下す神田は開華樓の「きやり懇親會」の席上で雀郎氏は是非連句の話を開きたいと申し入れた所早速快諾の御返事を戴いた上「ちやあ明後日その會をやらう」といふ事態にまで進展し、雀郎氏はその場ですぐメモパルをつくり席を立たれた。

◇

静かな雨の四月五日の夜松花の主壽山氏の木挽町の別邸に相集ふもの雀郎、玉兔朗、雨吉、不倒人、壽山自樂人、乱耽の七人。先づ雀郎氏から、連句の歴史、形式に就いての極く要點を聞いて直ちに實演に移つたが、新參の私は全く見學のつもりであつたのに、「どうでもいゝ作つてみる」と大いに怖れをなす手に無理矢理に筆を握らされ、句が出来ぬ度に叱咤されながら、諸氏の驕尾に附して、十一時過ぎまで苦吟、呻吟のうち半歌仙を巻きおぼつた

# 塵

## 脇起歌仙

疊のすみに残るものさし  
 家の子の顔で寝てゐるいたづら子  
 浮氣の虫の疼く春雨  
 吉原の裏は墨繪の大音寺  
 古道具屋の南京の面  
 明笛をひとり残して天の川  
 歸らぬ人をうらむ裁物  
 男手に育つ娘の年闊けて  
 百日紅にあつき一日  
 雑鬧の遠き巷を見下しつ  
 待てしばしなき品川の月  
 家賃には足らず四つに紙幣を折り  
 腹に晒の巻きやうがある  
 手古舞の草鞋男にむすばせる  
 印籠の緒も古代紫  
 散る花の常燈明へ一しきり  
 人さまぐに暮れる春の日

雀郎十、玉兔朗七、乱耽六、自樂人四、不倒人三、  
 迷亭貳、玄六一、  
 路郎一、執筆貳、

亂 雀 自 執 亂 玉 雀 玉 雀 亂 雀 玉 雀 亂 雀 迷 玄 雀 迷 雀 迷

### 六亭

◆ 連句第二夜は向鳴の俳諧亭に於て開かれ、おくれはせの玄六、迷亭氏を加へ、雀郎、玉兔朗、自樂人、亂耽の六人で、七時半より始めて午前零時半まで五時間有餘を費してやうやく一歌仙を卷いた。

◆ 俳諧亭の主雀郎氏は、すなはち家づとにせよこの脇起歌仙の稿を私に下された。

私はその御厚意を萬謝して、こゝに「秋の塵」一巻を収載していた。勿論之は川柳連句としての一つの試作であり、之に就いては廣く江湖諸氏の御批判を仰ぎたい。

◆ 尙ほ雀郎氏は、本誌に深き蘊蓄を傾けられて「連句論」を執筆して下さる筈で「秋の塵」はその前奏といふ役割をも持つてこゝに登場した。

(亂耽)

# 母の眼

—前號雜吟より

福田山雨樓

近作柳樽より

凡人になる氣の屠蘇に目が据り 某人  
これが即ち凡人なのである。この人間  
味には心から親しめる。好きになれる。

そして僕等はこの句を前にして、人間禮  
讃の字幕に接することが出来る。更に裏  
返してこの句を味はふならば、燒芋では  
ないが温みと香ひが、そのユーモア感の  
中に漂ふてゐる。「目が据り」といふ句語

は、古川柳も珍重してゐたと見え「段  
梯子水の給仕の眼がすはり」などがある

春芝居動けば匂ふ見合の娘 薰舟

繊細な感覺を生かした句である。しか  
も濃艶な春の感觸が溢れて、いきなり美  
の陶醉境につれて行つてしまふ。東京で  
小萩と云ふ句のうまい作家に感心したが

句主の多彩な藝術的手腕には敬服する。

きぬくのひんぎんの皮に目かそし 麥刀子

これは、又情痴にたけた句境ではある。  
叙法もそれに照應したうまみがあつて、  
いつかな讀者を尻目にかけてゐる。作者  
の若さに比してあまりに老練な手際であ  
るが、句材と觀點とそして制作に忠實な  
賜であらう。

眉濃き女に不倅つらくなり 梨生

「なり」止めは斷定語だけに一句の妥當  
性が問題になる。この句の場合も問題で  
ある。眉濃き女に不倅つらく、とは限ら  
ない。が、それにも拘はらずこの句が持  
つ眞實がある。そしてまぎなくと感銘を  
描くことが出来る。武玉川にありさうな  
氣もする。

待つころる落葉のおさるるなる 噴兒

夢幻的な詩情をそゝる句である。純情と  
靜寂と大自然とが心よい息遣ひを見せて  
ゐる。詩的な、いとも詩的な川柳として  
提示することを憚らない。

御日機と童話を聞て居。バルーン 勝二

句そのものが童話の世界である。それが  
好々爺然たる勝二氏の近付たることに

いて、僕は殊更興味を覺える。氏の人柄  
を思はず純眞さ、のんびりさが窺はれる  
昔の狂歌あたりには浮世を茶化した文  
字の遊戯が多かつたが、この句の境地に  
はそんな不純な氣分はちつともない。雜  
踏と喧噪にあへぐ都會の空に、一步退い  
て視線を放つた句主の虚心な投影である

母の眼がさつと變つた生活苦 祥月

「生活苦」といふ言葉は稍生硬だが、句  
の視角は鋭い。家庭の柱石たる母親の顔  
面神經は、生活の苦汁をなめて益々こは  
ばつて来る。破顔一笑して慈愛の眼ざし  
を投げ與へるいとまの、餘りに少いアツ  
プツデートではある。

川柳塔より

借金とともに人物出来か、り 雅幽

濫いそして苦い川柳である。借金を罪  
惡視したり、借金に恐怖をもつものには  
およそ分らぬ句境である。借金と云ふも  
のには恐ろしく眞剣味と奮發性を伴ふ。  
借金の重壓に苦惱することは、やがて人  
生の苦惱と試練に關ふことになるのだ。

堺筋―ばらく立つて見よ給へ 艸樂

大阪市の堺筋はメインストリート。書となく夜となくバスとスピドの洪水である。小閑を得てビルディングの壁にもたれてその眼まぐるしい風景を凝視して見給へと句主は親切な手招きをしてゐる。だが其處に齎られるものは決して都市讚美や文明禮讚の謳歌ではなく、執拗な憂鬱と焦燥感が忍び寄るであらうことを聲を盗んで警告してゐる。

寒い鼻湯呑の中へ入れて飲み 春秋

感覺的には時代がかつた古さがある。萬句合せの昔に歸つた安閑さもある。けれどもそれは句の觸覺であつて味覺ではない。多忙と疲労に染色された近代小市民にとつて、朝の或は夕べの喫茶の一ときは、いみじくも日本趣味的な、だから懐古的な川柳境でなくてはならぬ。

怒鳴つてる顔はお金か、あつらん 卷二

いつも思ふことであるが、斯うした言葉の切れつばし見たいな川柳に、含蓄と餘情の如何に多いことかと不思議でならない十七音字と云ふ額縁の中で、奔放に馳せるムードとシラブルが、とても効果的

であることに僕はブライドさへ感じる。

白粉きけてゐる、ホイと呼び 明珠

日常茶飯事とは、およそ川柳から輕蔑された詩境のやうだ。そしてこの句は正に日常茶飯事である。日常茶飯事であるだけに平明で、安易で、單調、虚心である。尻を放つたやうなものである。しかもこの句から汲めども盡きぬユーモアと人間味とが流れてゐるのをどうすることも出来ない。斯くてわれは、日常茶飯事に川柳に生さられるのだ。

電柱と煙突話しこむよなべ 民郎

雪深い信州を春景としなくては、この句はピンと來ない。工場の夜業に精を出してゐる屋根の上では、ストーブの焰を吸ひ込んだ煙突と、雪の重壓に苦しむ電柱とが、冬の夜長を囁き合つてゐる。假死のやうな白銀街に働くものゝ愉快が物語られてゐるのだ。

ふぐ仲間思ひ出してる雪の空 華水

恥かしい次第だが僕はまだ河豚を食つたことがない。臆病で食ふ勇氣が出ない。いや臆病なものには食つても味があるまい。思ふに河豚を食ふ者は、大膽で快活

で健啖でなくてはならぬのだらう。果せかな華水君は其の條件に美事適中してゐる。で、河豚仲間と云ふものも性格的に同氣相求むるのであらう。

この句は微笑ましき空想と食指を働かし乍ら、雪空を望んで胡座をかいてゐる

## 川柳叢書 架(五一)

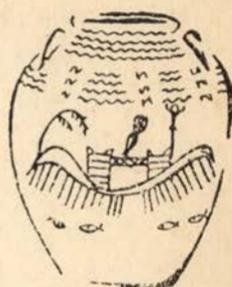
### 川柳叢書 第一篇 松窓句集

齋藤松窓 著

▼本書の巻頭には木村半文錢、麻生路郎の序文がある。

▼昭和八年三月二十四日發行。菊半截一〇九頁。普及判郵稅共二十四錢。特製壹圓。京都市北白川伊織町川柳叢書刊行會發行。

▼著者齋藤松窓氏は京都柳壇の長老で、寡作であるが独自の句境を持つてゐるので一讀の價值充分である。



# 川柳塔

路郎選

住田亂耽

輕氣球揚る淺草モンタージユ  
 新しい世紀のほふ街をバス  
 銀座アルプスへまひるの昇降機  
 みずてんと握手して出る石疊  
 雑株時代ですと六號活字言ふ  
 櫻咲く瞬間を見る脚本家  
 利権屋が重い襖を閉めに立ち  
 こぬか雨船首巨きく岸壁へ

上京車中吟

生田翠夢

雑踏へ寝臺券がある強味  
 馬道の雨に親しく惚氣さく

春やよし上野の鐘をきいて寝る  
 春の雨こゝは吉原仲之町  
 ダンス藝妓その肉體を見せてゐに  
 あはれ女となつた夜を寝す  
 あゝ云へばこう云ふ女世帯じみ

中澤濁水

服掛に己が苦勞を想ふ居間  
 嫁げばもうそれどこじやない趣味となり  
 見事娘に着せて家賃は滞り  
 返禮へ定木の如く濟す辭儀  
 洗面器うつす途端に今日の智慧  
 黒枠に出世してゐる舊い友  
 失業の咲けば咲いたで増すなやみ

西田 艸樂

女專の生徒達の鼻の低さ

男兒中學入學

制帽を冠つて使ひ潔きよし  
日本間へ通され作法寒いなり  
櫻の下でも勘定がきつちりしてゐる  
腹の底を割れば弟が世話になり  
パンガロー眞赤なものを干して春

朝田 新水

借りても借りても夫の浮氣  
皿洗ひとも書けぬのが不幸なり  
チツプも出さず考へてばかりゐる  
不器用な男甲種に合格し  
レコードも聞かず無心考へる  
佛法と別に家賃は滞り

春元 紀太

朝鮮にて

アリランの價値旅人が掴むなり

旅順にて

東京にて

日の丸のひしと胸打つ爾靈山  
旅の灯へ頼り切つてる友の顔  
もやひ船春を見つけた蟹一つ

妻病みて(二〇)

石鹼のへらぬも淋し妻病みて  
看護婦の白衣家庭にもものし

加藤 文醉

父の亡い事を意見は繰り返し  
打ち明ける膝の亂れにフト氣付き  
よく出来る子の行末のことでもめ  
焼香の順番が来た顔になり  
讀經にちる蠟燭をとり替へる

橋本 綠雨

借りたらぬ金にお酒がほしい也  
まかれたと知らず千日二度目也  
酒ついであなたはしかしどなたです

妻の心囊炎兩側性濕性肋膜炎(二〇)

病妻に二月三月四月と來

四ヶ月も切花をみる看護なり

阿部 閑生

提げてゆく荷物の中で時計鳴り  
ソイダ水女にもある咽喉ぼとけ  
病院の廊下に一人残される  
念佛のところ嫌はぬ父となり

福田 山雨樓

阪大病院に縁雨兄令閨を見舞ひて

付添ひと云ふ麗人の多ければ

鶴峰氏と共に縁雨兄令閨の平癒を祈りて

眞夜中に住吉様の砂利の音  
朝の湯吞で掌をあたくめる

山陰大會に出席

湖へあやふく消える田舎道

○ 毛利 九波

照りぬ匂ひぬ春の丘なる二人に  
愚かにも酒量を誇りたる我  
後からのぞくとかくす少女なり  
衣装美學に價値すけられし女かな  
人の子の淋しさ若き酒なるか

あゝそうだ春はこゝまでやつてきた  
物みんな動いてゐるにかたおもひ  
パーラーの匂ひを女つき破り  
さめざめと女は泣いてそれつきり  
頬こけし男へ春の風さらり  
現實にかへれば女母があり

西村 明珠

子を連れて春は楽しい人に見え  
旗出したかと病人に聞かれたり  
文鎖を負けすぎらひな子がおさへ  
うれしさにたのまれもせぬ事をする  
起きぬけに働らきに出る服を着る  
巻きすしの端が貰へて留守居なり  
豆電氣人も及ばぬ役を持ち

長男中學へ入學

卷脚絆居間で巻いたりほどいたり

須崎 豆秋

さみしさに時計の下へ床をのべ  
一撞きがいくらの鐘に霞む奈良  
借金の高も流石は名士なり

賞められてからどうらかな字も書けず  
交番の留守へこんにちはく

新婚の夕鐘君へ

自轉車が空廻ひするぞ、うれしいぞ

H男兒を擧ぐ

男だと大きく知らず電話口

長谷川三汀

初期癩が薬をもちて歸りたり  
女子大出蹴出しを蹴つて歩くなり  
泣けて来る眼へソツと薔薇押しあてる  
病む父をふと思ひ出し三を下げ  
バナナむく乙女の指も春のもの  
似顔繪のあつさり禿げて書かゝれたり  
お貸ししますと勸業銀行書いてあり

岩崎柳路

仲裁は堂に入つたる酒を酌ぎ

君知るや愛の技巧と云ふものを

満洲に路郎師を迎へ車中にて

夜行汽車空氣枕のしはれて居

大連にて

ベロケから快樂へ既に酔ふて居る

旅順にて

ドライブに廣瀬中佐を偲ぶ海

老虎灘にて

三人が揃のどてら旅の膳

吉田水車

路郎先生へ

日滿をこゝにも繼ぐ師の御手

祝夕鐘君結婚

幸福な二つの影に春の風

贅澤は言はぬが寫眞返へしとき

お優しい女車掌の切りたまひ

春衣裳あるにまかせて風邪をひき

女風呂マダムの聲がよくとほり

石森静太

死のと言ふおんなの指があれて居る

天才へ眞縮のやうな雲がゆく

あるとき

刀根山で死のふときめぬ雲はやし  
いつ死ぬか知れぬと櫻の下で撮り  
戀の夢・湯たんぼにさはりぬ  
極樂か地獄かエレベーターが落ち  
養生相叶はず櫻さきみだれ  
萬才師だまつてうどん喰べてゐる

水谷 鮎美

何某といふことにして酒をのみ  
好きといふ妓のほろにがき三十五  
草笛のあまれる呼吸の戀なりき  
自由を叫ぶいろにでてゐる雲  
緋けば聖書の文字も春めけり

荒井英賀夫

初對面の春峰、かき松兩氏へ

呑みんさい唄いんさいと世辭がなし  
それからの藝者は黙禮だけになり  
人の戀きたないようにつばをはき  
大川に水のないのもさびしいね  
もう起きてよいか／＼も愛の巢よ

渡邊 曉童

ついせはしさのおみそれをわび  
彼岸まぢかく祖母の丸髷  
茶瓶の口が留守ですと言ふ

父 (三句)

六十一働きすぎたとも言はず  
本ばかり讀む息子でと嬉しそう

妹尾 變人

恐ろしい事に笑へて仕方なし  
キツチリと時計は動くやうになる  
相性が口實になる悲しさよ  
濡れてする役は小さい丁稚なり  
孝行を又うたはれる春の雪

平井 春光

辱めうけた日からの貯金帳  
無心責め嫌な男が来なくなり  
薬瓶提げたのもゐる甲子園  
アンパイヤ捕手へ接吻しさうなり  
氣の毒な對話も實費診療所

眞田 幸 捐

年寄に兵 隊 檢 査 美 まれ

奥様の風呂敷葱をまけてあげ

鹿兒島にて

金のいる橋を大方渡りかけ

關門海峽

本州と九州空は晴れてゐる

よく出来る子供を持つた仕舞風呂

日野 華 水

鏡を拭いてでぼちんの黴

御尤もだがとは社長の言葉にて

客の子に疊の破れ觸られる

出養生男の靴はエナメルよ

姫田 夕 鐘

さし向ひ故に都會へ嫁にくれ

がさくこそ茶漬の音もふたりさり

新妻のうしろ姿も俺のもの

おいと呼ぶのもてれくさい髭でゐる

大西 八 歩

旅に出て無口いよくだまり切り

まだ若いといふはチツプを出し過ぎる

自轉車に軽く突きあてられる春

意見した方がその夜の灯をくゞり

櫻狩なげ又君は泣き上戸

飲まされて味方を賣つて歸つて來

看護婦もつれて櫻を見に出かけ

梳櫛の雲脂の嵩にも春が來し

竹内 機 見 女

父母逝いて久し

自由さへまだものたらぬ涙が出

やましきのハンドバツクが渡せない

氣の立つたはたきに床の花が散り

四五錢の詐欺に夜店の亢奮

芝 四 葉

かばかりの事に疲れる身を救く

女氣の何時とはなしに機嫌とり

青柳の道を口笛通り過ぎ

病 床 吟

雑誌みな集め四五日寝るつもり

北川 あや 美

未來など忘れ女のあたゝかみ

馬鹿にする中に親身を見せて呉れ

彼女だけ愛し消極的に居る

尼 綠之助

遊廓の灯をふりかへる終列車  
今晚も父のない子が戸を締めて  
春の月袂の糞をふつと吹く

後藤 青兒

轉向へ日本人の血が通ひ  
初春をいと寒ふ居る陶器店  
ブルジョアの犬まで吾をさげすみて

梶谷 巷二

流行はちと荒つほい男前  
漫然と出るステッキは地をつかず  
蓬餅ホームシツクにして呉れる

江戸みつる

引眉が飛びあがつてる賣春婦  
浮草の女日本は飽きたといふ  
破つてく便箋と午前二時

植山 九天

山雨樓氏令息の入学を祝して

制帽を父のと並べ掛けてみる  
はねかけた自働車の番號おぼえとく

末亡人へ

骨を納めて烏さく里

春多 春秋

きのふけふおとなしすぎる人に飽き  
ほんたうの事を云ふから家が揉め  
愚痴をもらせば女のすぐについて云ひ

奥野 禿山

不景氣に紙の櫻もない茶寮  
得心をすれば裸になる氣なり  
資本さへ續けば損も面白し

松下 小柳子

腹の立つ奴だこゝまで来たけれど  
ひとり居る氣樂さひとり嗤ひけり  
靜かな部屋に鏡臺王者の如くあり

熊谷 紅

病身の脊中が丸い毛メリヤス  
空腹の頭の上を通る雲  
母である事に氣ついたウエトレス

石曾 根民郎

從兄の結婚

背の君に一步おくれれて春の影  
ボロ會社庭に樹の芽のふくを見て  
旅役者驛に運んで来た愁ひ

首藤 竹楓

情熱を秘めてマダムの襟化粧  
青空に戀の手綱を任せ切り  
笑ふ子も泣く子も高架線の影

春の野の中で白髪を抜いてくれ  
石丸 春峰

女給 M 子

ほつておいて下さい理想が違ひます

明石 柳次

叔母さんへ

思ひ出は箸の先にも轉りて  
つくつくしの影とゐるのもひとり

平井 冬呼

作業服に僕の心がありません  
費ひこみ女給の知つた事でなし

宮岡 白峯

短靴の紐がよごれた集印帳  
すねもやきせもやき三十八歳よ

湯原 美笑

久方にあんな淋しい顔で逢ひ  
嬢さんに重い手紙が來てゐます

大鶴 喜由

ピンセットにも似てどちらからもよる

二十歳の春を毎日襟換えて  
以下として妥協の位置にかしこまり  
収入の一端妻の肩を持ち

## 粒々集

御影 長崎 柳秀

もう起きて欲しい味噌汁煮つまり  
遮断機へ顔見合せる女工連  
まどろしい戀なり娘十五六  
初戀の葉出てくる幾何の本  
真心の他にも云ふ術が要り  
兄弟と云ふは親から見た話  
不用意に貰うて呉れた嫁一人  
赤禪かけた姿に見る風情  
死んだらの假定へ觸れば弱くなり  
女房に染めた若さををだてられ  
一本になりたてといふ裾さばき  
森律子三家庭の美彌子

信じてるだけの夫で物足らず



# リタ嬢について

大阪市立天王寺動物園長 林 佐 市

○アレ猿でんの 妻 伸び 上り

リタと云ふのはリオリタから来た名で、ミアフリとかカリカとか云ふ名もありました。之はフアンから答案を頂いて付けた名でその葉書代が四百圓もかつて居ります。リタは利多でよい様ですが姓名學から云へば非常に悪いので、三年間持たぬと云ふ事であつたのですが、三年持つたので少し責任が軽くなつた理由です。名を變へ様としても自分ではリタと思つて了つて居るので他の名で呼んでも分らないのです。

猿の概念を云ひますと三つに分れて居ります、即ち、人、人似猿、猿、疑猴類で人を入れて四つになり、疑猴類は猿の中でも下等、もので猿もどきと云つてホケット猿とかキツネ猿とかが之に入ります。之等はつないで置かぬと直ぐ逃げ出して了ふもので、人似猿は高知、猿類で人間に最も近くてゴリ、赤狸々、黒狸々、手ナカ等が之に入ります。よく世間で云はれて居ますが、猿がど

んなに進化しても人間にはなりませぬ。祖先は同じで、人間とも猿とも違ふものであつたのです。私の所に書いてあるのは「人間に後一步」としてあります。この言葉は非常によい語だと褒められます。

○リタ嬢の目に人間がバカに見える人間の云ふ事は大抵分ります。坐れ、歩け、腰をかけ等は云ふ通りにします。しかし向ふの云ふ事がさつぱり分からぬのです。喜んで居るかと思つて行つて喰ひつかれる事があります。此間も喰ひつかれて長い間痛みました。腹のへつた時に膳を見せたり、美味いものを見せる喜びの聲を上げます。しかし異様な聲で喜んでゐる聲にしたら大さすぎ聲です。歸る時に一人々々にサヨナラと云ふのか挨拶をします。しかしそれがオハヨウかサヨナラかゞ少しも分りませぬ。

○來世はもの云ふ猿になつて來いリタ嬢に就いての投書が非常に澤山來ます。愛嬌がないとか親切でないとか、無愛想だとか、坐つた時にズロースがなかつたとか、少し見えとたか、見えな

つたとか、又風采がきたないとか、奇麗すぎたとか、種々雑多の投書が來ます。幼稚園の嫁婦からこの様な投書が來てゐます。多分雇はれたいのらしいと思はれます。また男の方も服を着せとか、お了ひの時には挨拶をさせとかの投書もあります。實にスターになるとつらいものです。私たちは、その間に狭まれて瘦せる様に思ひます。スターになると何日も一度は出なければなりません。風邪を引いてゐても、工合の悪い時でも……お金を投げて貰つたら随分澤山蓄まる事と思ひます。金は好きです。此間も城の崎の客（これはよく知つてゐる人です）からよかつたのですが、別室でリタ嬢と會はせまして、うつかり「金が好きです」と云ひました。お金を見せると喜びます。好きだと云ふと投げて呉れます。たゞお金を握つてゐる事が好きらしいです。

○カメラを置いてリタ嬢とります。寫眞をよく知つて居ります。寫眞的にもスターの位置を備へて居ります。位置

を決めると取りすまします。

○リタ嬢の春片戀が笑へない  
五月の七日に婿が来る事になつて居ります。二月に五歳になる狸々が見つかりました。只今印度洋航行中です。五月の中頃か六月に盛大な結婚が擧げられる事になつて居ます。その結婚式を「うちでして呉れ」と云ふ希望者が大變多いのです。リタ嬢は九歳です。中々しつかりものですから娘天下になる事です。婿になるもの、スターをワイフに持つた惱を味ふ事です。今出来かけてゐるその夫婦の新宅はアンコウ舎といつて、温度湿度共に適度になつて五つの室が作られてあります。

發音を教へる事に就いては、さうして教へるかが問題です。大學の先生が来て試験をさせて呉れと云はれました。青の紙赤の紙を持つて、此方が見せると彼方も同じものを見せる様な試験だつたので、私は「おやめなさい」と云つたら先生少し怒つて居られた様でしたが、それを駄目です。と云ふのは見せると云ふ事を教へなければならぬからと云ふ事です。ピアノや自轉車が私が教へたのです。自轉車等はふめばまわるとは十五時間か、自轉車を教へるのに十五時間か、乗る様になりませんでした。今日した事を明日やるかと云ふとやりません。それは物まねてした事ですから。只此方から意思表示をすればやりません。ベルと云ふとおしと人間とは較べる事が出来ません。或る事は十

歳位の事をしますが、又或る事は五つ位の事しかしません。人間を動物と較べると人間は智慧が先に發達をしますが、動物は身体の方が先に發達をします。文字を書きます。字を書かすと(よく人間の子供がする様に)紙の隅や端の方だけに書いて眞ん中を明けて置きます。隅や端がつまると裏返して書きます。字と云つても字みtainなものを書くのです。横へ引くのはよく動きますが縦の方が六ツ敷らしいです。しかし此頃は縦を引く事もやります。

井園長、イヤ



鏡前が開かぬと油つぼを取つて来て鏡前の穴に入れます。鏡前の穴に油が入つたか入らないか分らぬので油壺をのぞいたりして居ますが、一度油つぼ(ミンシにさす様な壺)から油をセメントの上に出して油がある事を確かめて又鏡前の穴に油をさします。これは教へないのにした事です。それは昨年の夏涼しい所に置いてやれと云つて置いたのですが、鏡前が錆びついて開かなくなつたので園丁が鏡前の穴へ油を入れたので、しかしそれでも開かなくなつたので園丁は油壺を置いてそこを出て行つたのです。私が見ておますと、毛布を油壺の上にかけて毛布を引き、少しづつ油壺を近づけて、とうとう

手に入れました。そして園丁のした通りに鏡前の穴、所へ油をさしたので、それまでは、かうした事を知らなかつたのです。

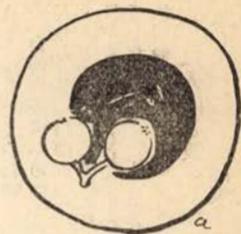
煙草はよく喫ひます。消す時はうまく火の所だけ消しました。消す時はうまく一度時は火を下にして灰皿に入れて置きます。そうすると火が消えませんが、「消せ」と云ふと消します。そして消してから、火が付いて居るか居らぬか、今一度喫ひて見ます。

この點非常に火の用心がよろしい。煙草を喫はせると頭が悪くなると云はれてすぐに取り上げる事にしたので、そうすると、それ迄は鼻から煙を出して居たのですが、すぐ取り上げられるので、それを忘れて鼻から出さずにパツパツパツと喫ふ様になりました。

毎日かゝさずにリタを見に来る人があります。そして外のは少しも見ずリタばかりを見て居ます。二ヶ月位續けてあればかり見て居ます。神戸、和歌山の方から「今日も出て居るか」と電話をかけて見に来る人もあります。

此間病氣をした時、それは大變で、新薬を送つて来た人、處方箋を送つて来た人、新穿から黒焼を送つて来た人、又洗米や香水を送つて来た人、天理教で拜んで呉れ、又おまじないをした人、又西式の食餌療法をした人等と、それを見ておまじないにたよれと云ふ様に、大いに鉢合せをして弱りました。

(分つては長西三郎博士) (夜櫻會館の隣人日野水蜜郎)



# 古狸窟雜筆

(三)

梅本塵山

(三三) 伊吹艾

今の世には、艾の産地を、近江國の伊吹とすれども、此れは誤謬にて、實は下野國の伊吹山なるが如し。

「柳巷談苑」

伊吹山のささも草は、近江の伊吹山にあらず、下野の伊吹山なり。袖中抄に、後拾遺にのせたる實方の、かくとたにえやはいぶきのさしも草、といふ歌をひきて此伊吹山は美濃近江の境の山にあらず。下野の伊吹山なり。能因か坤元儀にむれを出すとあり。綺語抄に伊吹山は、下野にあり。此山にささも草おほくおひたりとしるせり。六帖に、下野のしめ津の原のさしもぐさおのが思ひに身をや焼くらむ

枕草子に、下野へいきける人に、

思ひだにかゝらぬ人のささも草たれかいぶきの山は告げしそ

これをみれば、下野の伊吹山なることあきらけし。

(三三) 堅魚

かつを即かたうをにて、古は脯肉にのみ造り、生肉は食料にせざりし故に「徒然草」には「この魚おのれらわかりし世までは はかばかしき人の前へ出る」と侍らざりき云々」と書かれしならむ。異名を松魚といふも、脯肉の堅硬にして松樹の節に似たる故ならむ。亦、烏帽子魚といふ異名に就きては、別に説あり。「傍廂」  
鱈は上古よりありしかど、生にてはくは

す。皆乾して堅くして食ひし故に、堅魚の名おほせしなり。延喜式にあまたあるも、皆乾して堅きなり。

「延喜式」内膳式

東鱈十二斤。島鱈。熬海鼠。蛸。雜膳各六斤。堅魚九斤。雜鮓六十斤。御膳神供

御

(三四) 寢惚先生

蜀山人大田南畝、みづから寢惚先生と戲號して、「寢惚先生文集」を著作せるが此戲號は明和の頃江戸市中に流行したる「先生寢惚たか、そこ臍じや」といふ戲語を採りたるもの也。

「寢惚先生文集」明和四年印行。

陳奮翰々、先生寢惚乎、夢乎、現乎、幻乎云々。

「長枕褥合戦」

近當はかならここウと打笑ひ、先生寢惚たか、そこ又臍じや、へそより淺きうぬらが智恵、云々。

(三五) 千兩屋敷

江戸時代に於ける、宅地の代價は、坪敷に由らずして、間口の廣狭に由りたるものゝ如し。而して商業地の高價なるものは、間口一間を、金壹千兩にて賣買せられたるもの也。

「翁草」卷之百二十二

嘗て聞く江戸に千兩屋敷有り。夫は間口一間の價、千兩なりとかや。是は通り町本町邊の事なり。先年余が知れる人も、彼の地に店を出すとて、本町に於て間口五間半の家を、五千五百兩に買しを、まさに其人に聞けり、云々。

(三六) 獸 肉

昔は、藥喰と稱して、冬期に猪肉鹿肉等を喰ひしが其等の獸肉は、百目づ賣買されたるもの如し。

「浮世床」初編卷之下

猪を百目買つてやる筈だが、此中の晩もだまを食はした、云々。

「柳多留」

鳴などがつゞくものかと又百目

(三七) 春三夏六

春三夏六秋一無冬といふことに就きては、古よりさまゝの説あれども、生魚に鹽をする詞也とするが、最穩當なりと思はる。

「卯花園漫録」

春三夏六秋一無冬といふ事、俗諺に男女の交通の數量のやうにいへども、是は魚の鹽加減の事のよし云ふ人あり。おかしき事なれば書とめ置く也。

(註)生魚に鹽するに、春は三分、夏は六分、秋は一分、冬は無鹽にても魚はよくもつと云。

(三八) 石 碓 藝

多藝なれども、一の優れたるもの無きを、石碓藝といふ。亦、茶碓藝といふもあり、此れは自己の家業にあらぬ、藝能に達せるをいふもの也。此外に石碓藝といふものあり。

「異説まち／＼」

石うす藝をそしれる事世一般に同じ。然るに或人云、石うす藝もよし、それだ

け／＼、何を見ても面白くたのみありといひし面白し 云々。

「鹽尻」卷六九十七

武勇は武士の能なり、家の能にもあらぬ歌道の勝れたるこそ残り多けれ。碓は種々の用に立てども、坐敷にはあはず、茶を挽く一能にて坐上にも置なり。兩人の手跡も和歌も石碓藝也と批判せられしなり。

「諸道聽身世間猿」

針手もきかぬ石臼鳴。三度の朝夕の外に間鍋の菜好み、陰口が悪いとて、近所の茶飲にさへはねのけられても、云々。

(三九) 探 幽

狩野守信は、我邦有数の畫家にて、別號を探幽また白蓮子といふ。此れはみづから穿鑿もせずして、探幽と號したるならむが、遂に後世の笑草となれり。

「仙臺問語」

不知名目ニハ至テ可笑コト有り。元信以來ノ畫家ニハ周信・探幽ヨリ高手ハナシ。探幽ノ名アル畫ヲ長崎ニ來ル華人ガ見テ、腹ヲ抱テ笑フ。俗語ニ探幽トハ陰口ヲサグルコト也。

# 麻生路郎先生鮮滿川柳行脚歓迎句會

## 京城句會

三月十二日午後七時

京城共立無盡會社樓上

這般路郎先生滿馬川柳行脚の途、京城に立寄られたのを機とし、朝鮮川柳社、四温吟社主催、朝鮮新聞社後援の下に歓迎句會を催した。何分突然の催しとして準備萬端行届かなかつたが、遠く仁川からの参会者もあり、出席者三十五名豫想外の盛況を極め、全く嬉しかつた。路郎師とは反對のコースをとつて滿洲から内地への歸途、朝鮮ホテルで路郎師と落合れた春元紀太氏も同夜出席された。同氏ともゆつくりお話したいと思つてゐたが、閉會後同夜の汽車で直ぐ内地へ向はれたのは残念だつた。猶選後路郎師の京城見物の感想及作句の心得等に就て興味ある且つ有益な御話を承つた。(橋本言也報)

### 席題 旅

路郎先生選

氣まぐれな戀に耽るも旅の空 翠嵐  
四五日は己が天下で居れる旅 翠人  
切りつめる旅費は夜汽車で寝る水の味  
意病のある旅行要るだけ旅費は要り 甫了

旅に出て聞けば方言なつかしい  
また友に逢ふて旅程が狂ふなり  
女房には女房に話す旅があり  
旅日記今日一日暮れてゐて  
旅といふ事が嬉し知己とゐる  
車窓から入る虫しばし旅にあり  
(五)旅なれた客にぐんぐん追越  
(同)兒の土産荷物の一箱上に入れ  
(同)見物の旅でないのを引張られ  
(同)旅行先女兒出生の報知来る  
(同)負切れの程で来る旅人宿  
(人)酔ゑるる母子に先の遠い汽車  
(地)不愉快も愉快も先の旅の金  
(天)旅なればいつそ淋しく寝てみよ  
(軸)戀に似たころ妓生握手され  
(同)旅の人かくしきれない語尾

翠嵐 麗月冠 汀春 琴聲 青芳 可宵 紀太 汀春 樂坊 喜笑 同 可宵 路郎

### 題 喜

正木柳建寺選

喜びの強き眼頭熱くなり  
子心に餘程嬉しい今朝の雲  
喜びの膳は家内の酌でよし  
喜びの聲が溢れて會があり  
樂轉はカメラの前に嬉しそう

麗月冠 翠嵐 紀太 甫了 樂坊

發令がないといふ顔ゆるんでる  
よつばごと見えて親父も瀧を見せる  
喜びの夫人神戸へ出迎へる  
喜びが一月早く慌てさせ  
喜びへもう母譯もなく泣ける  
(五)退院といふ日一の明るすぎ  
(同)母親の喜ぶ顔をたのみにし  
(同)卒業の今日は明るい膳につき  
(同)運命は知らず喜悅に酔居り  
(同)生き甲斐を知る電文を讀返り  
(人)喜ばす氣は出しぬ顔を見せ  
(地)合格の喜び姉を見つけ出し  
(天)喜んで歸る子供に犬かゝるた

青芳 喜笑 同 千丈 可宵 琴聲 麗月冠 同 水味 汀春 可宵

題 ホテル 橋本言也選  
ホテル迄追ひやつて来る社會班  
所感かとホテルに御曹子長く話し  
觀光團ホテルの夜を賑かし  
間違えさうにホテルの部屋へ入る  
植物で仕切るホテルの喫茶室  
インチキのホテルとは後で知った  
大詐欺師ホテルといふを根城にし  
寫真班ホテルの門に待ちかまへ

翠嵐 樂坊 清流 雨城 麗月冠 紀太 としな 翠嵐

朗らかに小鳥ホテルの朝を鳴き  
温泉で會つた女に逢ふホテル  
翠風

(五)安宿へ木賃ホテルと洒落て  
水味

(同)寝る丈巾ホテルと決り荷を運び  
琴聲

(同)暫くはホテル暮す新歸朝  
文丸

(同)ホテル今名士が着いた車寄  
琴聲

(同)警戒の中をホテルへ乗りつゝ  
水味

(人)人力車ホテルを長い列で出る  
同

(地)うもつホテルの窓が昔な開き  
可宵

(天)思ひ出のホテルにもホネームン  
翠嵐

平壤句會 (平壤)

三月十三日夜 吉川夢月報

宿題 雨 路郎先生選

繪に書いた様に渡場で雨に濡れ  
柳雅朗

雨の音なんか聞えぬさんざめき  
秋外

濁るだけは濁れと片隅蹲まり  
柳雅朗

日直へ腹は立たない花の雨  
柳也

相傘で戻るつもりへ雨が霽れ  
可敷

俄雨 皆卒業の記念傘  
雅月

春雨へ派手に廣がるネガンの灯  
竹翁

(人)猛烈な応援團も雨を逃げ  
樂文

(地)雨宿り娘の居るに心づき  
雅月

(天)自動車で行く土砂降の面白し  
夢月

初恋の暮る同じ社から退け  
春魁

戀といふか適痒い其の日なり  
京平

(人)振袖は察して欲しい胸を抱き  
可敷

(地)戀知つていっそ淋しい身の廻り  
夢月

(天)銀幕の戀を覆ひたい母となり  
京平

(軸)その戀をましがらせる金の  
路郎

(同)戀ごころ死にたいふことも  
同

席題 最合傘 可敷選

言傳へ只頼まれた最合傘  
京平

最合傘後へ鼠鳴をきき  
春魁

行き過ぎたのにふと氣付く最合傘  
京平

父ちゃん昔を丸めてる最合傘  
夢月

(人)せめてそこ迄に嬉しい最合傘  
京平

(地)最合傘雨はそなたに降つて  
夢月

(天)急用の女房の傘に久し振り  
秋外

席題 持寄 春魁選

持寄といふ景品へムラがあり  
可敷

持寄りの花見音頭に興がのり  
兎角

持寄つた料理で花とおけさ節  
京平

持寄の世帯を示す星條旗  
錦魚

持寄た智恵に詫びてる不幸な兒  
柳也

持寄つてまことの手に陽の温さ  
夢月

持寄りは人の物から箸をつけ  
可敷

安東句會  
三月十四日夜 安東、於滿洲飯店樓上  
玉田峯草報  
路郎先生選

題 見送り 銀波

わけもなく涙となつて見送られ  
同

袂別一夜眞實を聞かされる  
同

今日だけは泣きたらドラが鳴り  
同

もう逢えぬ方と思へば目が曇り  
峯草

見送りが濟めば着物の話なり  
荷草

送られてうつかり云へぬ勤先  
八道

見送つてしまへば用のないお方  
仙峰

毛皮の中から手と手國際都市の驛  
泰平樂

見送りに時計忘れた事を知り  
同

(人)見送りの心へ呑まる横着さ  
すみ子

(地)見送りの心へ虹の橋  
水先

(天)見送るスクリウ池く掻き廻す  
同

奉天句會

三月十九日夜 於公記飯店

滿洲國が出来て未だ内地から一人も柳壇  
の要人が来られないのを淋しく思つてゐた

時大早の雲影の如き路那先生來滿の報に接  
して吾等は文字通り欣喜雀躍した。三月十九

日夜さやかな宴を公記飯店に張り、飛脚的  
旅行に疲れも見えぬ先生を圍んで談論風發、  
大に滿洲を語り興到つて是非とも云ふことに  
なり、俳人、柳人、素人の混濁をもつともせ  
ず、先生出題「馬車」滿洲に依て苦吟くだ

人の如く、十時半惜しき歎言を閉ぢた。その成績を左に(青龍刀報)

馬車(マーチョー) 路郎先生選

肩書を忘れ馬車ぬぎる 髭 新朗

お師匠と二人馬車で風を切り 同

あゝかひ扶持で馬車を乗り捨てる みつる

姑娘の足馬車の上で組み 松代

馬車の顔見せ子役二人のせ 同

馬車うね、蛇柳の並樹 同

康徳の春だ馬車のペンキが乾く 同

馬車でちとてれくさい夜店の灯 青龍刀

馬車に一人で乗つた手のやり場 同

支那馬車の鞭の音する水溜り 木耳

満洲 青龍刀選

決心が満洲に来てのんびりし しづか

満洲語二つ三つ吊り籠の鳥 圓平

母に出す手紙満洲の嘘も書き 松代

満洲に来て支那服の似合つて来 同

満洲でお月さへを見る共稼ぎ 新朗

満洲に易者も少し野心もち 同

一年も住んで満洲語ろろぞ みつる

煉瓦の街馬車が走る満洲よ 同

豆粒の蔭でこそ満洲語 同

北濱を出て満洲に居る噂 同

(秀)奉天へ着く三等車の四合縁 木耳

(軸)満洲の旅のなごみに歡喜佛 同

(同)来た氣持ハルビン迄を持ちたら 木耳

(同)話まで満洲鮓は大味な

路郎先生の句

馬車を呼ぶ旅馴れぬ人も居る

君と僕馬車は今城の外

馬車に我が人生を話しゆく

夕陽あか、汽車は直線

北陵に来て冥心を疑へり

みつる君に

君すでに箸の太きに馴れし頃

### 撫順句會

三月二十日夜 於撫順日之出館

兼題 旅 撫順川柳社報

路郎先生選

春の旅かへりけ船にきめて飲み 舟禮

初旅をうながす様に荷が出来る 蝶古

旅行先プランカ變へて酔はされる 同

旅からの亭主人の便りか子に讀き 矢車

ホネムーン宮島からの杓子が来 柳路

つくぐと旅にある氣へ夕焼ける 天弓

妻や子を夕日へ思ふ旅にある 同

旅日記いつも寂しい時に出し 喜代六

旅先で火の用心を書いてやり 同

憂鬱は旅で冷たい目と出逢ひ 岸柳

途中下車スタンプだけの真い身分 同

母に出す旅の便りは嘘を書き みつる

旅先に案ずる母にすまぬ夜 同

(人)旅に出て拾ふた今日の女房も 喜代次

(地)皆無事か自分も無事、旅、父 岸柳

(天)旅に出て女房の膳宿の膳 岸柳

(軸)旅人でなげや立派な呑み仲間 路郎

兼題 便 福井天弓氏選

便箋一枚足らぬ椽へ曲げ 阿喜良

便箋人の命も買つてやり 阿豆起

便箋へふと見當らぬ老眼鏡 外風

便箋の罪を無視した忠告文 矢車

便箋に君幻となつて来る みつる

便箋ハナハトだけで書きつまり 松代

性格が細かく便箋紙をうすめ 蝶古

隣から借りて来て書く便箋紙 十念坊

親ごころ便箋にまで氣くげり 喜代次

便箋の紙質を選ぶ頃になり 同

公休日丁稚便箋買つて無事 仙涙

便箋か開き一本喫ひつける 同

達筆を持ち便箋の物足らす 仙涙

(人)事務的な社の便箋に親しめず 矢車

(地)便箋へ爲替を送る愚痴があり 蝶古

(天)便箋を一枚代筆たのみに来 仙涙

(軸)便箋へ犬が吠えてる更けて 天弓

兼題 客 岩崎柳路氏選

不意客に夫婦困つたやうな顔 清司

客用の煙草に遠慮しあつた手 蝶古

客の菓子坊やはあれが欲しいなり 岸柳

見知らない下駄來客を目で知らせ  
應接主人の趣味を額に見る  
三味音につれてそるく唄ふ客  
客の目へ額の古さも親しまれ  
相客にむつとする洒落聞かされる  
買った時だけがお客にされてゐる  
ホーターはお客の氣分見抜いてゐる  
客の目に馴れレビューの輕いエロ  
茶の客へ印象つける春の髪  
來客と趣味を合した蓄音器  
客の髪はめて理髮屋櫛を入れ  
不意客へ妻のたしなみくさざる  
來客の事でもめてる勝手元  
客の用娘ハツキリ知つて居る  
（佳）來客にもう恥しい女の子  
（同）裏門を見返す客の頬冠り  
（同）客足止めた狐は二百圓  
（同）碁の客へ電球替へて父は負け  
（人）客の無い俵更アスフアルト  
（地）客がニア人殖えた皿の音  
（天）マ關をいきなり上る客が来る

仙 涙  
同  
十念坊  
天 弓  
同  
みつる  
同  
外 風  
同  
矢 車  
同  
阿喜真  
松 代  
同  
同  
十念坊  
矢 車  
同  
同  
阿喜真  
天 弓  
仙 涙

鞍山句會

三月二十一日 於天祐居

宿題 生 路郎先生選

カンテラの光に重い日か生さる可鳴

尻からげ義理を守つて強く生き  
生活の扉を開けた賄賂  
生存の爲めには弱い肉も食ふ  
満洲で生てるそれもいゝだらう  
生活のこんなところにある娼婦  
障子張り替へ生花も取り換る  
生活の虚偽に縋つて圓く寝る  
（人）生きてるんが堪場は眞赤  
（地）誕生日藝術寫眞など撮らむ  
（天）五十年生きて天秤だけ残り

水呼坊  
草 明  
栗 豚  
水呼坊  
みつる  
柳 路  
草 明  
水呼坊  
同  
路 晁  
席題 急 路郎先生選  
（住）病名へ急性と云ふ形容詞  
（同）急がしい旅に飛行機なご思ひ  
（同）急行で去る師心に影を置き  
（同）急速な空の模様にも動く船  
（同）急いでる譯は話さず逢ふ行く  
（秀）生きて行く死に行ふ足急がく  
栗 豚  
水呼坊  
草 明  
みつる  
水呼坊

大連句會

三月二十二日 於滿洲土建協會樓上

井上麟二選

洪笑の果てへ苦惱の横たはる東明  
朗かに笑つて見たい宿泊所塵聲  
負けてばつかり支那兵の豪語 雨明

笑

うれしさの微笑となつて溢れ出る  
笑談ぢやない滿洲國は實在だ  
出迎へた笑顔よさんがあちらしい  
笑ふにもグーペーウィーがはやく  
血を吸ひこむ大地の微笑  
決死隊笑つて死ぬる幸を持ち  
うたゝ寝の笑顔うれしい事らしい  
朗らかに笑つてそれが渡世です  
敵前の野營必勝の笑ひ聲  
人を笑はせて泣いてゐるヒエロ  
戦友はみんな笑顔で死んで行き  
失笑のあわてゝ自己をとりずまし  
ピアノの上にマスコットは、笑み  
一日の疲勞へ無心な兒の笑ひ  
失業者笑つてられない日が續き  
笑はれて笑つてそれで生きて居る  
（二）點嘲笑の眞中に強い我を据点  
噛み殺す笑ひもあつて座はしまり  
お互ひに笑つて過去の事に觸れ  
笑つてるにしては淋しい笑顔です  
重役が笑へば恐ろしい  
笑はれる度に子供の智慧がつき  
（人）婦人含笑ひ合つてる中に鬼氣  
（地）追及をせず一笑に付す重味  
（天）笑つたまゝ死んでゐる

薄 明  
宗 嗣  
玉 枝  
宗 嗣  
雨 明  
同  
玉 枝  
笑  
佛 心  
三 碧  
南 九  
瀧 明  
柳 路  
磊 笑  
凡 雅  
松 代  
瀧 明  
如 蛙  
箱 八  
滿 山  
雨 明  
淀 月  
淀 月  
佛 心  
雅 堂

(軸) 健やかな笑ひ雲雀の草野から

宮武如蛙選

臺所の捨てた野菜の芽がのびる

萌え出づる春へ無慈悲な家を建て

一年の壽命が、萌える春の原

萌え草を鶏は歡喜の眼でつゞき

地熱もう殘雪のける露の臺

悠々と空家に萌える春の草

人間に教える様な草の萌え

萌える春夢見て眠る地下の草

黎明の土を起した蒔いた種子

下萌の中に早獻手を延し

春耕資金論議なげに草萌ゆる

萌る緋へ無心の内に向いてる眼

萌草へ今日も遠足やつて来る

(二點) 淡雪へ目覺め萌え初め草

(同) 萌芽の意氣濃潮と土を割る

(三點) 萌芽がコップへ伸び下女の趣味

(軸) 人の氣を搖ぎ初めたり草の萌

(同) 殘雪の皆嚼み殺す草の萌

(同) 豆萌(珍品として滿洲土産

熱愛 大島清明選

熱愛の數を集めた千人針

熱愛の續くかぎり金が必要

熱愛の續くかぎり金が必要

教へ子へ師の熱愛の目が届き

一人つ子親の下世話がおろかにし

人の口彼れ氣狂ひだとも云ひ

熱愛を籠めた病む兒の枕元

熱愛の裏隠されてゆく事件

父の無い子へ母の愛過ぎるなり

金婚の杖に春陽のまるやかさ

熱愛の二人になると黙り込み

受給日前に母親瘦せが見へ

熱愛へ女將笑へぬ事を聞き

鞭撻の母が落した涙壺

血走つた眼で親犬は仔を庇ひ

一心になつた劫火のもへしきる

烈々の愛へ已を見失ない

熱愛が滿洲里を産み出だし

目頭らに熱愛こもる母の言

(五客) 熱愛が子供の頬へ齒を當る

(同) 熱愛のシンホルと云ふ指の跡

(同) 眞剣に愛を語れば疑はれ

(同) 心頭へ愛の紅蓮の燃え盛る

(同) ひたすらに御國の爲の鐵甲

(人) 熱愛でこもつた友の不足税

(地) 熱愛のさめてはむい人と

(天) 嬰兒の心に通ふ母性愛

(軸) しつかりと心の底に抱く人

南九

紫浪

同

箱八

同

三碧

雅堂

蝶古

滿山

水母

草明

同

東明

同

如蛙

松枝子

同人

阿喜良

蝶古

東明

塵聲

淀月

阿喜良

佛心

宿題 心

路郎先生選

大黒と惠比須心を顔に見せ

近所から見ずかさされてる虚榮心

一心に玩具をこわす子の工夫

もう娘心で積んだり崩したり

するごも心の裏を讀んで行き

生活苦やさしい心すり減らし

明鐘止水心のおきごころ

心氣一轉君滿洲の土となれ

激動の心にもない世辭が出る

安心をさせるに借りた金を積み

改心をした日日記に小さく書き

美しい心のまゝを子は遊び

愛國の心左右にかけ離れ

マダム的心と別に葱は延び

(五) 心中も出来ない程に年をと

(同) 怒越しに邪心を洗ふ様な雪

(同) お顔とは大分離れた心意氣

(同) 本心を他所に世間の端を行き

(同) 嘘を言ふ心憎さを噛ふのみ

(人) 位正直と云ふ素直が淋しすぎ

(地) 大陸の心に通ふ晝の風呂

(天) 妾宅で妻子の事も思ふと云ふ

(軸) 凡人の心安きに聲をかけ

(同) 朗らかに月給だけは働く氣

仙庵

淀月

市路

同

清子

佛心

南九

三碧

蝶古

草明

水母

同

雨明

如蛙

松代

一徹

佛心

よし坊

阿喜良

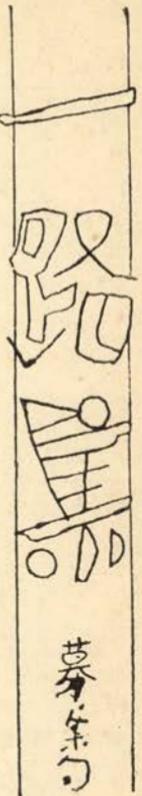
同

雨明

蝶古

清子

猫



西田 艸 樂 選

春の陽をまともに猫の丸き夢  
病氣して矢張猫を嫌ふての  
天窓の陽ざしに猫の尾が動き  
春や春猫とふたりであくびする  
猫の目に日の丸動く風があり  
留守番を淋しがらせて猫が鳴く  
朧夜の猫は猫脊で戀に鳴く  
桃割の仔猫あげますよんで來る  
猫の毛を撫でる虚榮の指白き  
妻の愚猫猫はよんな手に出合ひ  
臺所猫と暈がぶつつかり  
雨ぼつり／＼こつそりと猫歸る  
客人へ猫を残してめしを炊き  
講談へ猫の魔力の誇張され  
沈痛な空気をよそに猫の鈴  
化けても出そうに猫の斷末魔  
妾宅は猫も一つしよに迎へに出  
目的の違つた猫を飼ふ暮し  
あてこする聲で隣猫を追ひ  
高利貸猫へ情けを持ち合せ  
思案する眼に猫の走り行く  
鬱憤は彼の飼つてる猫へゆき

元南幸良しのぶ  
山天指吉のぶ

生活苦離れたとこで猫ねむり  
性慾の春とはなれり猫の聲  
夕暮を訪へば隅から猫が鳴き  
嬉しさは猫抱きしめて見せる  
淋しさをまぎらす猫がおとし  
ふびんとは知りつゝ小猫捨て  
自惚れの多いことよ招き猫  
就職の事に猫まで此方向き  
叱られたうづぶんとは猫知なり  
猫の仔を捨てた夜中に雨が降り  
淋しさは仔猫の鈴へふれて見る  
猫死んで三日心に影のあり  
迷ひ猫新月の夜を寒ふ鳴き  
不始末を忘れて猫を撲るなり  
初戀のそれから猫に鈴をつけ  
猫に仔に與へるミルクが羨まし  
月の屋根猫が縦走して更ける  
三味線にするごと猫をどなり  
獨身まゝ猫好きの男ふけ  
猫の戀隣の戀を聞いて春  
どん底の生活猫に覗かれて  
猫に歡心を求めに行く野心

喜紅白梟利勝秃同新史正吉  
由峰人生二山水呂夫左

川柳家戸籍調(續)

(係) 山雨樓

- (1) 姓名 (2) 雅號及別號 (3) 生年月日
- (4) 出生地 (5) 現住所 (6) 職業又は勤務
- 先(7) 好きな句(8) 自供の句(9) 川柳以
- 外の趣味(10) 配偶者及子供の有無(11) 嫌
- ひなもの(12) 川柳に手を染めた年月

(386)

後藤千枝

- (1) 後藤茂一、(2) 千枝、意外變人、落
- 馬宮人、松柏木、(3) 明治二十三年一月
- 廿二日、4 岐阜市長良堀田農家、5 京
- 都市中京區高倉二條南、(6) 京染悉皆業
- (7) 看護婦が去ぬと母親食へさせる(8)
- 未だ有りませぬ、(9) 謡曲、獨酌、(10)
- 妻あり子供なし、(11) 古川柳の眞隨を知
- らぬ新興川柳家、(12) 明治四十三年九月
- 頃、

(387)

磯部孔雀

- (1) 磯部誠一、(2) 孔雀、別號みくも、
- (3) 明治二十八年十二月一日、(4) 山口
- 縣熊毛郡室積町中之庄、(5) 同、(6) 室
- 積町役場、(7) 五葉さんの句が好きです
- 叩くのか突くのか十手變なもの五葉、こ
- んな句に心を引かれます、(8) 絶へず變
- りますので、別にこれといふ句がありません
- せんが、一句擧げよとのことであります
- から「秋の日を同じ惱みの西東」この句

猫の眼がふしく動いて蠅が立ち花涙  
 猫の眼がざらりと光る秋の夜呂香  
 欣びの部屋から猫が追はれて來上風  
 氣に喰はぬ同志と言つた猫の脊令上  
 (軸)戀猫の不眠症を氣づく筈を 艸樂  
 選後に よほご勉強して 頂戴したが五  
 十名ばかり全没か出したは氣  
 の毒である。猫の戀——屋根、月夜、寒空  
 猫と日向ぼこ——椽側、背伸び、じやれる  
 糸玉、猫と鼠——聲をひそめる、ブルジョ

袴

山月選

受付は仙臺平でかしまり 晨一郎  
 職人に見られたくない袴はき 彩泡  
 參拜へ後ろを向けて緋の袴 石流子  
 義理の世の袴はく日は工面して 三八郎  
 妻前に後ろに袴手を添へる 喜由  
 舊友の袴苦勞の にじむ汗 祥月  
 成功者母校へ仙臺平で來る 笛秀  
 雛様も袴を穿くやないかいな 丸子  
 色褪せた袴へ恩給涙ぐみ 花洵  
 袴着け表情少し固くなり 正夫  
 仲人にされて袴を借りに來る 玉兒  
 就職へ片身の袴着けて出る 白蝶  
 喜びの部屋に更けてる長袴 令風  
 初詣で袴も清い風を入れ 小松  
 娘の袴今の家計の身を碎き 萬雷  
 柔道の腕たくましい紺袴 禿山

ア猫の怠慢、猫の鈴と娘、猫と妾宅こんな  
 類想が厭といふ程あつた。誰しも避け難い  
 類想に氣附がなかつた事は作者の不覺、而  
 も其の想を一層深く練つて行く事、そこに  
 新らしい表現と勝れた描寫によつて、凡そ  
 脱する事に成功した句が皆善と云つてよ  
 い人の着想は皆似通つたもの、そこから  
 よい句の生れるのは作者の修練と努力に  
 よる。もつと勉強せよと駄目です。

西内村 山月 共選

七五三袴の可愛い宮參り 花子  
 麥畑を袴がつづる四月一日 宵明  
 新調の袴が目立つ披露宴 元山  
 大學生袴の紐がはねて居る 南天  
 袴穿く執事の頭固くして 寒草  
 斯う結ぶのよと袴の紐を見せ 菊路  
 式の日は袴の描ふ専修科 しのぶ  
 代表はセルの袴でかしまり 曉童  
 借り袴序に寫真撮つて置き 良吉  
 纏めて呉れるに友の脱ぐ袴 健二  
 纏つて慣れぬ袴を穿される 泉流  
 唯じつと仙臺平の子を見詰む 丁路  
 日の丸の下で袴の威儀正し 黙紅  
 奉祝へ妹の袴借りられる 鴉夫  
 焼香に袴の摺れる音ばかり 葛路  
 師範代ツト袴へ風を受け 吉左右  
 起されて袴の泥を見せられる 久米雄

其頃の私の心境がよく出てゐますので愛  
 誦してゐる位です、(9)なし、(10)妻あ  
 り子供男女各、名のドロングゲーム、(11)  
 格別ありません、(12)大正三年四月

品川陣居

(1)中野竹雄、(2)品川陣居、糸井武雄  
 竹魚亭主人、(3)明治二十八年五月三十  
 日、(4)東京市日本橋區北島町、(5)東  
 京市品川區北品川二丁目四三、(6)出版  
 部、東京巖松堂、(7)好みとしての代表  
 句「大道具左へ差すは煙草人」(笠竹坊)主  
 張として「焚き終えて風に吹かるる身の  
 廻り」(茶六)その他古句、友人句に好き  
 な句多し、(8)「社と家と唯一本の道が  
 あり」、(9)川柳も文學だが、廣く文學  
 趣味、(10)別居せるハイフあり、子無し  
 (11)おでんのスジ、みみず、蠅、凡ての  
 死骸、低能、策略のある人間、肉身なれ  
 ど父、凡て下等な奴、(12)大正七年頃と  
 嘔三味は言ふ、要するに品川陣居は彼の  
 半身みたいな者、彼在つての存在なり。

大野琴莊

(1)大野廣治、(2)琴莊(前號比侶志)、  
 (3)明治廿八年九月廿一日、(4)東京市  
 芝區、(5)東京市向島區寺島町五丁目一  
 二六、(6)ゴム製造工場經營、(7)お絞  
 りの中へ眼をあくい、氣持雀郎、風呂  
 敷の米どうしても米に見え、芳浪、洗ひ  
 髪雀のあるく音をき、(花川洞)、(8)強  
 情の涙一滴惜しく落ち、後悔の跡へ火鉢  
 を押してやり、お絞りにへ交際負けの手が



春愁の袴に淡い校舎なり  
 白墨の香る袴で嫁き遅れ  
 インテリの袴が場所を取る  
 紺の裾へ擴がる春の風  
 義理ではく袴へ別な金がいり  
 高利貸今日は袴を外して來  
 眞人間になつた袴のはき心地  
 卒業日色あせし袴の紐をとく  
 電報を握つたまゝで袴はき  
 棟上げへ袴をつけて無學なり  
 異議があり袴叩いて立ち上り  
 生活の袴を釘にかけてをき  
 就職へ袴のひだを亂すまじ  
 表彰をされる袴の短かすぎ  
 兄弟に袴を穿かせ氣が疲れ  
 獨り者袋の様な袴はき  
 劍道の初段破れた黒袴  
 好い月に借りた袴が恥しい

新市街 宵明 春光 竹雅 靜波 雀歸子 九波 しのぶ 貴代志 萬雷 たくを 錦城子 春峰 小松 美津女 有魚 月

菊畑袴で來ればかしこまり  
 十八の袴を脱げは嫁く話  
 二重生活仙臺平がまだ買へず  
 紹の袴舞妓へ少しふざけたり  
 最つ先に袴束束されて行き  
 最敬禮袴の裾を濡しけり  
 感 吟  
 青春の意氣に袴をはき破り  
 おとうさんの袴でおとうさん  
 級長の親といふのが袴で來  
 しはくちやになつた袴で説論  
 半身を寫しにセルの袴はく  
 姑へ美事袴を仕立あげ  
 定礎式袴の裾に泥がつき  
 けふは主賓あすはへつら袴なる  
 片意地を袴の紐へ言ひつ  
 乳を殺して袴の女教員  
 新紅喜シズ 山 水

## 山陰川柳家各位

先般本社山陰支部聯合句會出席の爲め参りました際は種々御厄介相かけました。忙がしい旅で大變失禮致しました。乍略儀誌上にて御禮申し上げます。

福田山雨樓

## 社告

今回みちのく吟社主宰小林不浪人氏を本社客員に迎えました。

米國材建築用材專業岡田材木店(書記—主人代理)、(7)御近所はどう言はふとも三味が好き(柳葉女)、思ひ出はこの宿の湯この廊下(飴ン坊)、(8)明日は雨らしい百合の香が籠り。記念碑にはかなく残る輪卒の名。(9)登山、旅行、(10)瀟つてお多福の案内と子供二人(女子)一月中にまた一人出ます、(11)蛇と約束の出來ぬ人、(12)大正十一年秋。

(33) 尾村馬人

(1)尾村幸三郎、(2)馬人、(3)明治四十三年二月二十七日、(4)東京日本橋區(5)東京東橋區築地二ノ八、(6)魚肉屋(7)進軍喇叭の眩しい錯覺(國夫)、(8)人間がせまく住んでる秋の空(9)短歌及其理論、(10)目下無し、(11)決斷力思素心のない人間、(12)昭和三年四月頃。

(34) 馬語苦樂公

(1)馬語清觀、(2)苦樂公、仙嶺、(3)明治三十五年十月六日、(4)東京市麻布區櫻田町、(5)神戸市須磨區平田町五丁目六、(6)鐵道省官吏大阪鐵道局經理課神戸倉庫、(7)焚火から昨日の嘘がばれて來る重陽子、馬鹿の子が泣いてみんなが叱られる(紋太)、いくらでも好きな句はあります、(8)系圖のはしくれへでも書き残し度い自信のある句を一句だけ是从何年かゝつても作り度いと思つて居ます、(9)あり過ぎて書けません(10)結婚してもう七年にもなります男の子が二人、(11)子供の泣聲、(12)中學二三年時分ですから大正七八年頃。

# Nishincho MEMO

◆路郎先生は鮮満川柳行脚から三月二十九日歸阪されましたが旅装を解かれる暇もなく引續き川柳きやり吟社の十五周年大會に出席のため四月二日夜東京へ旅行せられました。そして四月十日夜大阪市南区心齋橋筋心交社で鮮満川柳行脚講演會を催し前後二時間に亘り興味と旅趣に富んだ大講演を聞きました。當夜の出席者は水府、萬よし、山雨樓亂耽、紀太、紳樂、かほる、里十九、鶴峰、青兒、夕鐘、華水豆秋、禿山、勇、開路、機見女葉、清美の諸君と私。

◆福田山雨樓君は四月十四日、本社主催動物と夜櫻句會々場準備の爲め早くより出席され、

◆「夜櫻」の選句の後山陰支部聯合大會に出席のため同夜大阪發九時三十分の列車で出發されました同君の目覚しい活躍を感謝致します。

◆畔柳會(本社大鐵局支部)の主

催で四月十日醍醐吟行され、三室院境内から寄せ書を送られました。山雨樓、某人、九天、久米雄、山人、天秋、杏林、喜山明坊、天八、紫朗、笙人、若蛙一峰、山人、秀太、水客、一光の諸君

◆龜井辰修君(客員)は三月廿一日函館市大火に類焼の厄に遭は

されましたが、一家無事に避難されました。安否さへ氣遣つてゐた折柄不幸中の幸びと存じます。

◆前田五健君(客員)は四月十一日櫻の別府へ見學に行かれ左の句を寄せられました。「花吹雪反り身になつて舞臺めき」

◆吉田水車君と喜多春秋君(同人)は四月八日、伊勢參宮(但シ別々に)されて左の句を寄せられました。伊勢參り二見あたりで暮れかゝり、水車「神宮の杉の高さへ上をむき」

◆本社御池橋支部の幹事村松夢裡君が多忙のため西いわを君が代つて支部幹事となられました同君の活躍を祈ります。

◆平岩司郎君前號大阪の住友生命へ勤務される様書きました

が「三井生命」の誤りつき訂正致します。尙大阪に勤務されるので本誌編輯や月詳句會には必ず出席されると知らして來ました

◆きやり吟社の大會に本社から路郎先生、山雨樓、亂耽、紀太翠夢、勇の諸君が出席されました。

◆齋藤松窓氏の誕辰五十回記念川柳會が四月十五日夜京都市仲源寺で催されました。亂耽出席先生から祝電、六十數名の盛會

◆故藤村青明集刊行記念句會四月七日夜神戸市協和會館で催されました。

◆柳誌「京」の百號記念大會が五月六日正午京都木屋町民政會館で催された。本社から路郎、亂耽、司郎、柳次、開路、友帆の諸君と私とが出席しました。

◆函館市大火に際して五十餘名柳友が罹災されたに就て柳友慰問義捐金を青森のみちのく吟社が募集されましたので本社から希望者が募つて同吟社に依頼することに致しました。

◆吉田水車君は都合で同人(評議員)の部へ變更されました。

◆加藤文醇君は五月六日京都市柳社の「京」百號記念大會に出席されるとの知らせを寄せられました。

◆釜ヶ池觀櫻句會が四月十五日

催されましたので本社から竹内機見女さんが代表して出席されました。各地會報を御參照乞ふ

◆塚越迷亭氏が本名正光に改號されました。

◆左の處から寄書が届きました。路郎先生を迎えて(奉天川柳會)路郎、青龍刀、遊樂、水耳新朗、みつる、圓平、外數名

◆麻生路郎先生を迎えて(撫順川柳社)三月二十日於日之出館

◆路郎、柳路、みつる、仙淚、矢車、蝶吉、十念坊、岸柳、舟禮喜代次、松代、天弓、阿喜良外數名

◆松田青風伯歡迎會(愛知、川柳へちま會)春風、文辭、岐洲溪、吉山、香童、榮、松岡、外數名

◆本誌編輯は山雨樓、機見女の諸君と私とで致しました。(縁雨記)

## 轉居

◆花園百樹氏(大阪市東區道修町五丁目二〇)(電話本局三三六五番)

◆明石柳次君は(京都市室町蛸薬師下藤井商店)

◆久佐太郎君は(太田彌夫)神戸市神戸區山本通五丁目五(電話元町三五五)

◆永田里十五君は(改築のため當分大阪市南区日本橋筋一丁目一六)

川柳バイ  
欄 筍をむく心

福田 山雨 樓

本號の題は「母」である。今回は相當佳句もあり、添削の必要を認め、句も可なりであった。そこで大等の句には短評を付することにしたから参考とされたい。それから句意の判

然せぬもの、技巧の足りないもの、観念の不十分な句などに就ては、一々添削句を並記することとした。彼我對照して作句の技法を磨かれんことを望む。

母の嘘をさびしく白髪ふと見つけ 清春  
母に無理言ふて淋しく青春を病み 葉光  
(佳)病床の母を見舞った空笑ひ 久米雄  
(同)内職の母にすいてる終い風呂 鷗月  
母だけへ家出の譯を言ふてやり 伶人  
(佳)母老おんなじことを聞かざる 白英  
生活苦そのよゝ母の老ひ給ひ 晨一朗

さて清春君の句は母の白髪染めを見つけた淋しさを詠つたもので、上五に「母の嘘」ともつてきたのは、稍強すぎるが、「母の嘘さびしく」迄讀み下せばさ程眼立たない。純情の籠つた句である。

次に葉光君の句は、青春と書いて「はる」と讀ますのであるが、これは寧ろ單に春としておいた方が句の餘情を深めはせぬかと思ふ

原 句

飯事で母になりたいた子が二入 一夫  
父ゆきて母はとみに白毛なり 比良也  
だまつて母佛壇へ燈をあげる 水客  
三人の母で人氣のおとるへす ひろみ

添削句

まゝことに母、志願で二人もめ  
父元んてから母急に小さく見え  
佛壇へだまつて母の頭細し  
タイトルに二人の母と書いてなし

原句だと年令的にははつきりしても句がわかり過ぎて趣が浅いやうに思はれる。しかしこの句は葉光君の不自由な起居生活から生れたものだけにわれ／＼を打つものがある久米雄君の句は、下五の空笑ひが非常に含蓄のある言葉でいゝ。母への心配を心配からせまいとする。子としての心遣ひがよく受取れる。僅か一字のことであるが「見舞つた」のたをてにすると、わざとらしさが目につくからいけない。

鷗月君のは恐らく本集句での 歷卷であらう。句が抱擁してゐる情味と複雑感、味はへば味はふ程多くのことを物語つてゐるやうだ。着想が殊に優れてゐる。

伶人君の句意はよく分るが、母とあるところを姉としても肯ける。その點で動く句とも云へるが先づ無難である。

白英君のは恐らく實感であらうと思ふが子としての氣遣ひと思慕が表はれてゐる。又一面には軽いユーモアも漂つて、一讀微笑ませられる句である。

晨一朗君のは上五に生活苦とした點が、概念的であるが、母をいたはる心持が出てゐる。このまゝで母は年をとるのかと思ふと、

詫つてやつてお菓子を握らせる 杏林  
 末の子も嫁いで母の朝寐なり 有魚  
 うれしき日なり母が見舞に来てくれる 緹紅  
 日本髪亡母に見せたい結び上り 志津女  
 アルバムに見つけた母の舞姿 葉魚  
 もうこれで死なれる母を善光寺 晃路  
 いさかひの母へ涙のちらと見え 花涙  
 死んだ子へ母親ほめてほめちぎり 天秋  
 母にだけ話す積りの灰をかき 白葉  
 母なればこそ育つた僕等六人 奇代菓  
 限りなく母が喜ぶ達者な子 松路  
 卒業の息子へ母は人の好し 銀杏子  
 三僮の孟母を口に母淋し トミヤ  
 頭子をたよりに生きる母の瞳 洋二  
 夕闇に外出の母の下駄の音 美津女  
 悲しさは何も云へずに母の顔 三九  
 位牌の前に母の幻をおふ 蛇之助  
 入學へ縫上げおろす母の影 輝親  
 縁付けてから母の束ね髪 規堂  
 何とればとる程母を戀ふるなり 柳夢  
 二十年星つれども母のかへらす 都留逸  
 さくら紙土間に残りて母は留守 照坊主  
 子のいでしあと青空を癒し母 たてみち

詫びてやる母へ臺所何か焦げ 末の娘も嫁がせて丸い母の背 埃がぶつて實母が見舞に来てくれる 元結の亡母に見せたい締りやう アルバムに頬豊かなる母在し 善光寺母慾のない眼をつむり 口答へ母もう聲がうるむなり 意見する母は亡弟を賞めちぎり 母にだけ打明ける氣の灰を掻き 子が五人母はちひさく隅に寝る 大喧ひへ母は嬉しくお茶を注ぎ 卒業のその日の母の口輕し 轉宅へ母は近所が氣にかゝり 長男の顔色母の瞳がうごき 子の客に母夕闇へ下駄をはき 強情へ母おろしと膳をひき ちつげな位牌で母はいとお方 入學へ母追つかけるしつけ糸 縁付けてから母親の染めぬまゝ 何氣なき合せ鏡の母に似て 二十年母に離れて詩が上手 塵紙に行く先がある母の留守 青空を母全快の傾り来る

急に世の中が暗くなるやうな憂鬱を感じたのであらう。

以上のやうに「母」を詠つて、讀むものをし  
 て胸を搏たしめる句、着點の優れた句もあつ  
 たが、概れ皮相の句が多かつた。皮相の句は  
 作つても捨てなくてははいけない。そして幾度  
 も作り直して見て、眞に觸れた、これならと  
 云ふ句を得る迄努力を続けられた。つまり  
 作り足らないのである。作句の掘り下げ方が  
 不十分なのである。添削句は、多少句主の考  
 へと變つてゐるものがあるかも知れないが  
 よりよき川柳たらしむべく今一徹深く掘り  
 下げて見たつもりである。只筆先だけで句の  
 技巧を凝らすのはよくないが、漸次着點を深  
 めて行き、少くとも皮相な見方、感じ方から  
 脱しなくてはならぬ。恰度筋の皮をはいで、  
 中の芯をむき出すやうに。

### 回文課題

「故郷」一句。切 五月十五日  
 宛先 大阪市浪速區湊町保線事  
 務所福田山雨樓宛。但し一般投  
 句と共に事務所へ送らるゝも可



## 夜櫻と動物句會

四月十四日夜 於大阪市立動物園

主催 川柳雜誌社

撩亂の春、こゝは東洋一を誇る吾等の大阪動物園、爛漫の夜櫻を愛つる夜間開園、折しも四月中旬、土曜日の夜は、暮れなんとして春宵一刻を惜しむ。花に憧れ、擴張されし園の態と、珍奇な動物に心ひかるまゝに、群れ集ふ市民の賑ひよ。吾が社は此の日を卜し夜櫻、動物句會を催す。

集る句友七十餘名、電燭に映する花菜の下篝火に照らさるゝ動物小舎の前に、想を練る事數刻、八時過ぎ締切る。林園長の興味深くユーモアに富んだ講演を拜聴し、園の人氣者リタ嬢とキリンの句題披講は、微笑を以て終始した。尙此の夜、園内の樹の枝、雪洞の柱に數百枚の動物及夜櫻の句の川柳短冊が掲げられ、入園者の眼をひいた。(紳樂記)

出席者

路郎先生、愚龍、豆秋、鶴峰、紳樂、山雨樓、里十九、綠雨、美坊、春光、冬呼、新市街、紫六、水車、狩野、溪々、小柳子、坊哉、華水、竹楓、幸捐、司郎、史呂、白峰、觀月、白葉、章象、勝二、裸人、泰耶、青兒、一羊、默平、しのぶ、未廣、櫻見女、紀太、清美、勇、朴甫、昇鯉、丹生、彩泡、亂耽、四葉、霜雨、松太郎、禿山、青踏、二郎、丹路、沐天、俊翠、靜波、かはる、言人、四路平、葦平、白嶺、山抱子、耕之介、省踊子、信かず、小松園、友帆、白柳子、夕鐘、長三郎、外數名

席題「キリン」 路郎 選

櫻ちるキリンの首へ二三片 小松園  
兄弟のやうにキリンは顔並べ 力坊  
ルンハント背中合せにゐるキリン 山雨樓

キリンまた神經質な顔を見せ  
仲のよいキリン揃への寝巻着て  
長々とキリン遠見の役に立ち  
不景氣をキリンの縞に似た財布  
自信ある首でキリンは隣まで  
月の夜のキリンの戀は空高く  
もう出来る寫生へキリン向き變へ  
首だけが繪になつてゐるキリン  
キリンから見ればあわてたやうはり  
花の雨キリンの頭から濡れる  
ほろよびへキリンの首がのびてる  
(五客)キリン今スタート姿なり  
(同)驅け出して見る樂しいキリン  
(同)重心の狂ひもキリンある  
(同)高慢に見えて困るキリンなり  
(同)小心をキリン險の邊に見せ  
(人)淋とにキリンは雨を見送つて  
(地)アドバルンキリンに遠眺なり  
(天)未亡人キリンへ少し笑ひかけ  
(軸)ネクタイが欲い姿、キリン立ち

兼題「夜櫻」 山雨樓 選

夜櫻ヘダラリの帯の廻り道 四葉  
夜櫻は電氣の光借りて咲き 紀太  
夜櫻の頃に夫は死にました 淡美  
夜櫻ヘ丁稚嬉しい宵となり 靜波

夜櫻へ船場育ちは下女をつれ  
 夜櫻の子供一枝ほししいなり  
 夜櫻へマダネシワームが落ちてくる  
 歸宅してから夜櫻のほこり知り  
 夜櫻に脱線したい顔があり  
 夜櫻へ救世軍は嫌はれる  
 夜櫻を造花の様に寒く見る  
 夜櫻の灯へ立つて國の事  
 夜櫻へ一丁先のキノマ街  
 夜櫻で幼い頃を聞かされる  
 夜櫻の赤さにみんな美しい  
 酔ふた眼に夜櫻は押寄せよう  
 傘持つて京の夜櫻見に出かけ  
 満開といふ夜櫻へ風があり  
 夜櫻に靴の先から冷えてくる  
 夜櫻の、こんな所に水溜り  
 つけ鬚と見えす櫻へ灯がともり  
 夜櫻が下のさわぎに散つて居る  
 夜櫻に月は曇つたまゝでより  
 夜櫻へ夕餉のすんだ一スクかけ  
 夜櫻へ氣分が悪いハンギン鳥  
 ライオンにかゝはりもなき花篝  
 夜櫻に都會の女よくしやべり  
 夜櫻をちぎつてゐるはテロリスト  
 夜櫻へ親子三人紙を布き

耕之助 雀踊十 豆秋 漢々 彩池 春光 信かず 言人 乱耽 春光 白葉 四路平 冬呼 俊翠 豆秋 紫六 機見女 青兒 紫六 禿山 司郎 同 青踏 愚寵 黙平

せがみつゝ来た夜櫻へれてしまひ  
 夜櫻へこゝらの店にも勝太郎  
 うち明けぬまゝに夜櫻雨となり  
 夜櫻のこゝらにベンチ欲しいなり  
 (五客)夜櫻に一人身の足早いなり  
 (同)夜櫻をきて鼻緒のゆるい下駄  
 (同)夜櫻にセルで来たのが嘘をし  
 (同)夕櫻夜櫻己は獨りきり  
 (同)夜櫻も更けて大學生の唄  
 (人)夜櫻へ吐息をみんな捨てまへ  
 (地)夜櫻へ自我を忘れぬ肩を張り  
 (天)夜櫻を二階で見るとハローモニカ  
 (軸)夜櫻に愛人の足棒になり

兼題「リタ嬢」 路 耶 選

リタ嬢に安心をして歸る嫁  
 リタ抱いてやる附添もかゆくなり  
 あたりまへの事へリタ嬢笑はれる  
 リタ嬢へ一直線の春の日よ  
 服を着てリタ嬢何かしやべりさう  
 リタ嬢は不其少女と云ふかたち  
 本性は現はしてリタは笑はせる  
 リタ嬢にまだ差し上げる子が残り  
 人氣萬點リタ嬢の巻煙草  
 リタ嬢へ櫻淋しき今朝の色  
 リタ嬢は春の陽射へ手をかざし

坊哉 松太郎 同 耕之助 坊哉 紫六 彩池 四葉 四呂平 白嶺 機見女 豆秋 山雨樓 白柳子 花坊 友帆 白峯 裸人 夕鐘 朴甫 山雨樓 新市街 白峯 沐天

握手しに来るリタ嬢に子供逃げ  
 カメラ向けられてリタ嬢とりまじ  
 リタ嬢の瞳にインテリはつれか  
 リタの目に大阪人は閑に見へ  
 リタ嬢に生れたかつた男居る  
 來世はもの云ふ猿になつて來い  
 リタ嬢の目に人間が馬鹿に見え  
 童心の今日半日をリタとゐる  
 寄せるだけ寄せてリタはぶらぶら  
 リタ嬢の春片戀が笑へない  
 (人)シンアレラ子にはリタ嬢の靴を見  
 (地)リタ嬢はいくら孫いぢ知らず  
 (天)あれ猿でんの妻伸び上り

彩池 亂耽 沐天 豆秋 漢々 奈里 言人 史呂 冬呼 愚寵 禿山 溪々 靜波

**本社五月例會**

日時 五月十六日(水)午後七時

會場 **日本橋俱樂部**

(大阪市南區日本橋一丁目  
交點北辻東入 電話南三四二四番)

兼題「橋」 三句 麻生路郎選  
 大阪市の著名な橋に限る

同 「掛取り」三句 高橋かほる選

講演 **鮮満の話 麻生路郎**

會費 金三十錢 (鉛筆持參)

(幹事) 新水、雅陶、九波、開路、  
白峰、角丸、勇、新市街



## 山本寒子をしのぶ

石 森 静 太

寒子。空し二十五の若さで散れる彌太郎君  
君が逝つてからもう十日にもなる噫、今ま  
で幾人となく吾支部の同人を葬つてきた私  
だ。こうした悲しみは豫期してゐたことでは  
あるがあまりにも君の思ひ出は私を泣かす。

櫻の話がはづむ時、嘗ては私達のいい先輩だ  
つた茨木奈緒美を失つた春。めぐつて今また  
寒子をうばはうとは悲しい哉。君を最後に見  
舞つた時堅い蕾だつた梅が、今朝は美しく開  
いてゐる。いま君をしのぶに私の日記が出す  
三月一日。寒子が別室へ轉ることを聞く  
「みのむし」(私たちの貧しい誌)の騰寫や  
装幀に多忙で朝よりひとり働いてゐるの  
で轉室を手傳はれない。寒子よ許せ、晩にで  
もゆくよ。

三月四日。お母さんが居らない時だ。「静  
太はんもうあまへきん」ただ一言云つたきり  
だ何と慰めてもいつまでも黙つてゐるばか

りだ。やがては眼 泪さへも浮べてゐるやう  
だつた。「寒子、僕これでかへるわな」。苦  
痛を訴へたことのない君だ。悲しい心でかへ  
る私だつた。

三月九日。よつほど苦しいらしい。咽喉  
をあの瘦せた指で示して眼をつむる。流動物  
も通らぬらしい。私にくる腫も苦しそうだ。  
お母さんが痰壺を洗ひに出て行かれる。その  
お母さんの姿もさみしい。今日も黙して歸る  
愚籠に「べん見舞に行つてやれと言ふ。  
三月十一日。主治醫からの「死の宣告」湯  
たんぼを人れに行かれるお母さんが、そいつ  
と僕に囁かれる。今更、慰めてあげる言葉も  
ない。私はうなづくばかりだ。寒子とよく似  
たお母さんの顔が眼に残る。

三月十三日。なま暖たかい日だ。朝から  
支部の用事に忙しい。鉢が足りない。……晝  
過ぎ寒子の部屋の窓が閉つて看護婦が二人

來てゐるのが見える。……午後五時半、悲し  
い知らせがくる。寒子が死んだ。つひに。  
見舞ふ人もすくない。だあれも居らない寂  
しい別室で母ひとりにまもられて「先生によ  
るしく言ふてや」と言ひ乍ら閉したといふ。  
私は君の死に目に逢へなかつたことを心殘  
りに思ふ。——言ひたきこともあつたらに。  
噫、君はもう私の前で句箋を手にしてえんび  
つなめてくれないのだ。淡い灯の中をお供  
へものなご取り揃へる。如來さまの軸を掛け  
る釘を打つ音が私の心にひびく。お母さんが  
黙つて佛花を買ひに眞暗いみちを街にゆか  
れた。

二人の友と愚籠 松雨と私とで お通夜で  
ある。線香の煙りが美しかつた。灯に、りん  
ごが光つてゐた。みんなはだまつてゐた。

三月十四日。川柳人ばかりで寒子を葬る  
寒子よ、安らかに冥せよ。弔辭を讀んでゐる  
手が震へて止まらない。字の上に寒子のほの  
白い頬が浮んで消えない。私の聲は泪でふる  
へてゐたことだらう。今日は此以上書きたく  
ない。私の心のやうに空は曇つてゐる。

三月廿三日。寒子よ、今宵も青い電氣カ  
バーをかけて、きみを、しのんでゐる。

## 寒子句抄

ふるさとにこんな蛙の夜があつた  
葉巻喫ふ顔を笑つて女くる  
夜の色に紛れけものと落ち合ひぬ  
虫の聲返りすれば咳となり  
新薬の値段を思ふ今日の咳  
死に觸れて人の心のおからさま  
ルンペンに其處は寂しく落葉する  
ふと抜いた指輪に過去の夢が觸れ  
友の死へ夕べの雨が光るなり  
月寝めて懺悔話にはいるなり

笑ふては淋し團扇の女です  
落葉ふむ匂ひ女にゆきあふて  
足袋ぬいで友を失しなふ日の瞳  
ある日の天井わたしを蠅人形にする  
すすめらおやといふ秋の日のこころ  
すすめは去んだわたしも窓をしめま  
くぼむ眼にむかふは落葉するのです  
風は哀しいふつと亡骸になつた私  
こひは——おぼつかにゆづつてやるう  
石蹴れば向ふは赤い屋根の家  
ある夕べ友の身となる鴉来る

あの日をよんで空は笑へといふのです  
夢の灯はひとりなむかへてくれぬなり  
鼻唄もよいぞ哀しき雲のゆく  
兄の手記も光明がないのなり  
眼をとちるわたし木の葉がらに落ちる  
雨はまだふりふるさとのごとくれる  
ゆれて灯のひとりぼつちになくすがた  
病院にぼくらたえてる鳥ないてある  
今打つたのは何時かしら。柱時計がみえな  
い。看護婦が廻つて来た。一時らしい。

—一九三四・三・二三—

過般小生鮮満各地川柳行脚の爲め錦地旅行に際しましては、盛大なる歓迎の句宴をお聞き下され、又大變御歡待に預りました。難有う御座いました。

右略儀乍ら誌上を以て御厚禮申上げます。

川柳雜誌社主幹 麻生路郎

## 鮮満川柳家各位

## 四國川柳家各位

過般 本社四國各支部聯合句會に出席いたしました際は、色々御歡待に預りました難有う御座いました。乍ら略儀誌上にて御厚禮申上げます。

川柳雜誌社主幹 麻生路郎







席題 飯、悪口、不具、一服、五

章選

ハイカラの飯が、少ない労働者

悪口を言はれ榮轉するのなり

真剣になつて啞の子棒を持ち

一緒に突つた不具者淋しそ

一服は何時もの眼になつてゐる

うつかり言ふた事が悪口にされ

一服してから打明けるつもりなり

不具の身にありキツイ風の吹く

一服してから、又意見する

飯時る日に悪口言ふて別れけり

夕飯にさかに行けばヒツチャなり

不具の人来いと云ふのは飲ませる氣

一服する間だんごり考ふる

長屋での悪口主人はき、流し

不具なれば遊びにゆかず母の膝

一服にホット我が身にかへりたり

一服ハットととする夏の影

川柳 雑講社 王造句會 (大阪)

二月十五日

於東雲ッラア

佐藤しのぶ記

兼席題

切花、元談、芝園

淋しさが續く日切花もしほれてゐ

切花へ春の娘がよくうつり

切花へ船場で育つた器量なり

切花へ娘は淡い思慕を寄せ

切花へ嬉しい話あるのなり

寛柳

岩石

破鼓

岩石

變人

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

情熱を秘めて切花持つてくる

午後五時に賣れる切花戀の花

キツスしてその切花を活けるなり

冗談のうちに本心ほのめかし

冗談の間に調子變へるなり

冗談の判らぬなりに笑ふてゐ

ためらうて女中の母はベルを押し

番組を變へておくれたベルが鳴り

昂奮をして番組を續み返し

番組の一年生は朝の返し

番組のいつちしまいに師匠が出

番組を云ふて戀人誘ふなり

箱組の色も嬉しい戀を知り

箱組のうら妬く事を知つてゐる

川柳 雑講社 神戶句會 (神戸)

四月八日

於明珠居

明珠報

兼席題 二年目

二年目の選手はみんなよく喋べり

二年目の男と男箸を持ち

二年目の重きになつた貯金玉

二年目の言葉は少し荒くなり

二年目の茶碗が少しかけてある

席題 遠慮

遠慮する學ではない君の家

遠慮して傘の中から顔を出し

遠慮した猪口へ煙草の灰が落ち

靴の紐生活線につゝてゐる

友帆

白柳子

白柳子

藤太郎

しのぶ

しのぶ

しのぶ

白柳子

大阪の泥つけてゐる靴の紐

席題 記念樹

記念樹の下で約束して別れ

記念樹へ待ち人が居るよりか、り

卒業が近く記念樹の金を寄せ

記念樹の前で丸詣同志なり

記念樹の櫓が立派になつた春

席題 花の下

花の下 窓生に髭があり

新聞がちらばつてゐる花の下

(軸)花の山花の下だけ暮れ残り

(軸)花の下女をまきみうちにする

席題 軍歌

軍歌 華水、明珠、春秋共選

男の子軍歌軍歌へ腹がへり

腹減つた時に軍歌をうたはされ

女の子軍歌の後をうたはされ

軍歌うたふて中のよい子等歸り

叱られて軍歌もやめる膳の前

子があつて軍歌レコード二三枚

貧兒、明珠對座吟

四月十三日

明珠報

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同





席題 雨 五

雨の晝埃のまゝの三味を出し  
降り續く雨に酒量の増すばかり  
四疊半別な氣持ちで雨を聞き  
雨垂れの一ツ二ツへ病み續け  
春の雨女房酒へ逆らはす  
人二三月滯めて雨も我慢をし  
地指でしたやうに雨垂の穴  
天俺一人だけであるまに濡れ  
軸すき焼の匂が迫る雨宿り

川柳 今里句會 (大阪)

於桃助旅館 市場沒食子報

兼題 進む 水 車選  
悪友の話がすゝむ土曜の夜  
進む可き道のおまりにはかなくて  
亡き父は進む思案の人でした  
進出の門出資本の事でもめ  
成積の進歩身體を案じてゐ  
軸進級の辭令迂かつに手ぶる

席題 春 雨 水選

佳入り世の無情に泣けて春の雨  
同春雨に傘が重たい風呂歸へり  
同春雨だからカルピスをのまよ  
人春雨が一人淋一夜のベツト  
地春雨の二ツパメは白い腹を見せ  
天春雨に色封筒字がにじみ  
軸夕顔が一寸伸びた春の雨

夜業から歸る夫へ湯がたざり  
夜業して夜業して急ぐ基礎工事  
喜 友帆  
由選 水

健選

拓水 大觀 春峰 素泉 夢舟 青帆 耕一路 五健

水選 夕鯉 夕鐘 沒食子 しのぶ

白嶺 水車 四路平 沒食子 雀踊子 喜由

(佳)夜業する音へ氣の立つ不眠症  
(同)酔醒めの水へ夜業の灯が映り  
(同)妻も子もあり夜業に滲む汗  
(同)割り込んで来るは夜業冷足

席題 新開地

新開地蕎麥なまめるく届いて來  
(佳)平凡な灯がついてゐる新開地  
(同)洋食は今日出來ませぬ新開地  
(同)號外の一吋遅れて新開地  
(同)トロツコの捨てられた新開地

席題 窓 口

(佳)一錢も同じ窓から渡される  
(同)窓口へあんまり恥しい爲替  
(同)窓口は四時煙草へ眼を細め  
(同)窓口のそこらに動く監視の眼  
(同)窓口の女手荒につりを出し  
(人)窓口へすわりたがる子もよま  
(地)窓口に新ニツケルの別な音  
(天)血の口で新ニツケルへあつた

席題 相 棒

相棒が來てから意氣を上げなほし  
相棒の名をまつ先に覺えた妓  
相棒がほしい宵なりネオンの灯  
相棒のしみん聞けば前科者  
(佳)相棒もやもめ何に性か合ひ  
(同)相棒は言譯までもしてくる

岩崎柳路氏歸熱送別會 (奉天)

三月三十日夜 於おでん屋權兵衛  
江戶みつる報  
過日麻生路那師渡滿されました節熱河に

て活躍中の柳路氏及松代氏は熱河より飛行  
機にて師に會ふべく歸奉され師の御滞在中  
は何かと御世話されました柳路氏夫妻は再  
た熱河に歸へられますので送別の意味に  
て新進作家秋山しづか氏と三人で路那師奉  
天に滞在中歓待して頂いた權兵衛おでん屋  
にて夜の更けるも忘れ二時半路那師 健康  
を祈つて散會

席題 權兵衛

三更に迷ふ叩く權兵衛の戸  
權兵衛の大阪辯で語る宵  
久し振り權兵衛のマグム酔はる氣  
滿洲の春權兵衛で呑んでゐる  
平康里から續く權兵衛の春

席題 平康里 (支那遊廓)

瓜子兒を一握り給係と突んで見せ  
濃麗なサーピスの色平康里  
ポーターに先づ連れられた平康里  
ピンカンリ連れの女は汚ながり  
平康里會長の娘踊らさせ  
支那語が解ればと思ふ平康里  
好奇心平康里に來てしま

かほる居偶會

三月廿五日夜 高橋かほる報  
前掛へ一寸も知らぬ人が來る 縁 雨  
前掛をすると女は古風めき 里十九  
前掛は力士のやうに酒屋ある 水車  
前掛の端にねぶかの先が見え かほる

司郎居小集

三月十八日 京都支部 司郎報  
 春季雜吟 五選

簞笥から引きすり出した春の色  
 見からの白きよ春の海暮るゝ  
 波頭春は来たのかまだなのか  
 春霞上から二人降りて来る  
 春めく日派出な服地の前に立ち  
 鉛筆を噛めけ折れたり春の夜  
 嘘をつく女へ春のガラスすむ  
 春の陽へ掌のニッケル貨射する  
 觸れた手に春の女のやわらかく  
 同 啓甫 黄子郎 同 史郎 平怪

川柳 萩之茶屋句會 (大阪)  
 雜誌社

題詠 櫻、霧 奥野禿山報

紅葉から櫻へ酌婦年をとりに 禿山  
 テカンシヨ花辨のない櫻さげ 九文錢  
 出張の日誌に早い櫻咲き 桂風  
 たてこめ霧の奥より瀧の音 禿山  
 二人共無言が續く霧の街 九文錢  
 霧の朝格子造の門を出る 銀波  
 賣られ行く女に霧の深い朝 桂風  
 川柳 梅田誌上句報 (大阪)  
 雜誌社  
 題 小鳥 かほる選  
 うらゝかさ小鳥は水をおびてゐる 觀月  
 病上りそつと小鳥の籠にふれ 靜波  
 小鳥こごり青空を見ている 鮎美  
 題 再婚 かほる選  
 再婚は遠い所と決めるなり 遊歩

再婚はせぬ決心の賃仕事 觀月  
 再婚へ前夫の氣性想ひ出し 靜波  
 (人)再婚の虹を見てゐる夕まぐれ 鮎美  
 (地)再婚の話のなかへ子が戻り 遊歩  
 (天)再婚をする氣になつたし張り 觀月  
 (軸)再婚へ金だらひから買ひ揃へ かほる  
 へちま會句報 (愛知)

三月十八日夕 於加藤文醉宅  
 渡邊蛟洲漢報

宿題 長襦袢 文 醉選  
 眞實になつて襦袢の話も出 くいち  
 人妻と成つて襦袢の柄を變へ 吉山  
 (二點)思出のある襦袢色があせ 蛟洲溪  
 (五點)片見分け俺にくも合ふ長襦袢 同  
 (軸)もう歸る客へもつれる長襦袢

宿題 廊下 吉山選  
 退屈な欠伸廊下へ伸びてゐる 香童  
 廊下から男のこゝろ見透され 文 醉  
 仕拂に來たのに廊下まだつづき 同  
 打ち明ける女へ廊下みちか過ぎ 文 醉  
 宿題 齒 香童選  
 繼母へ見せてはならぬ齒が痛み 文 醉  
 (人)貧さを聞分るゑる齒が痛み 同  
 (地)齒ブラシへ俺だに持ち具合 蛟洲溪  
 (天)漬物へ舞妓齒並の良さを見せ 文 醉  
 五分間吟 色 男 互選  
 色男雨の夜だけ顔を見せ 吉山  
 色男からの電話へ聲を變へ 文 醉  
 帳場まで又頼まれる色男 同

へちま會小集 (愛知)

三月廿一日夜 於吉山居  
 伊藤くいち報

宿題 格氣 五選  
 妬く氣にもなれず隣の二時を聞き くいち  
 格氣する母へ子供はついて泣き 吉山  
 四疊半それとは違ふバチさばき 香童  
 電話口聲を落して怪まれ くいち  
 格氣にはもう馴れてゐる床を敷き 吉山  
 格氣もう里へ歸へるうかと思ひ 文 醉  
 撲ぐられることを格氣は知らぬ 同  
 格氣なごいまして行く里の母 同  
 お隣の格氣を笑ふ手内職 同

御會葬御禮

本社總務橋本綠雨氏夫人外喜殿葬  
 送の際は御多忙中にも不拘遠路懇  
 々御會葬並に御弔辭を忝ふし御芳  
 志の段難有奉深謝候乍略儀以誌上  
 御挨拶申上度如此御座候

昭和九年四月廿七日

川柳雜誌社

# 編輯の窓

山雨樓

▼四月號好評のあとについて  
「鮮満號」とも云ふべき本特輯編を出したことは諸君と共によろこびに堪えない。

▼路郎先生には満洲から歸着後は疲れを醫される暇もなく東京に四國に川柳の旅を續けられ、特に多忙中のところ、執筆して下さったことは感激に堪へない殊に先生はこの爲めに宿屋生活までして書いて下さったのである。切に愛讀を祈る次第である。

▼巨篤武玉川二篇研究が愈々本誌から連載されることになつた切に愛讀を祈る。

▼川村花菱氏の「人と藝術」は從來われ／＼が考へてゐた觀點から更に數歩を進めた深い考察である。

▼本號も原稿が特に幅狭した上に、主幹の鮮満視察記事や彼地句會々報などで誌面を埋めた關係上割愛した原稿が尠くない。

名所名物川柳も一回休載する。

▼四月二十二日今治で四國支部聯合句會が開かれたので、路郎先生は太田隆彦氏(かつて本誌に愛猫ソロロについて執筆された)と同行で出席され非常に盛會であつた。先生は道後温泉で旅の疲れを休めて歸阪された。

華水君と僕も出席の豫定であつたが、急に差支へが出来て行けなかつたのは残念であつた。

▼四月十五日松江では山陰支部聯合句會が開かれたので、僕は夜行で行き、縁之助氏の案内で大社に參詣の後出席した、大變盛會で多數未知の柳人にお目にかかつたことは、嬉しかつた。

▼柳壇畫報は益々好評で材料も多數寄せられてゐるが、本誌は頁の關係で特に割愛し、鮮満グラフを以て之れに代へた。

▼本誌の表紙は大西長三郎畫伯を煩した。本誌の表紙畫も今や柳壇の一新機軸を示して來た。

▼月評は皆の都合が思はしくなかつたので僕が「母の眼」を書いた。

▼「マヌ嬢について」は本社夜櫻と動物句會の際林園長が御風邪と御多忙中のところを特にお話

し下さつたものである。

▼別項社告の通りみちのく吟社主宰の小林不浪人氏が今回本社客員に頂くことになつた。同氏は同吟社の開拓者であるばかりでなく北日本柳壇の重鎮として聲望を集めてゐられる。

▼四月五日の「きやり十五周年記念句會」には本社から路郎主幹を始め、紀太、亂耽、翠夢、勇の諸氏と僕とが出席した。會するもの百八十數名で仲々盛會であつた。

▼熱河の柳路氏夫妻は路郎主幹渡滿の際遙々大連迄見送つて下さつたが、又引返して奉天の句會に臨まれた上熱河へ歸へられたさうである。同氏の厚情に對して主幹は非常に喜んでゐられたが、その川柳熱げ羨ましき限りである。

▼客員藤里好吉氏は四月十九日大阪毎日新聞の「綠地帯」へ「喘息と戦ふ」と題して執筆された。

▼北川あや美君は病氣療養中であるが、最近大分快方に向はれたさうである。一日も早く全快を祈る。

▼四月一日から十二日まで東京銀座三越ギョウリで若原靜湖氏作「手びれり川柳人形展」が催され好評を博した。路郎先生を始め大阪の川柳家の句になるものも大賑賣れてゐる。

▼朝鮮京城から柳誌「川柳四温」が橋本言也、津田麗月冠氏等によつて生れた。路郎先生はその賛助員として聲援されてゐる。

▼末誌の愛讀者である米本儀助氏(夫人貴志子さんはかつて光纏抄欄で奮はれた團秀川柳家)は令息令嬢と三人で自ら自動車

を運轉して南紀へ御旅行中鐵道踏切で列車に衝突されたが、幸ひ三人とも輕傷ですまれたことは御不幸中の幸であつた。

▼綠雨兄の令閨外喜様はかれて大阪帝大附屬病院へ入院加療中の處藥石効なく遂に四月二十六日午前八時三十分永眠せられた誠に哀悼に堪えない。

▼二十七日御宅で告別式が營まれたが通知が間に合はなかつたため川柳家の顔が揃はなかつたのは心残りであつた。

### 投稿規定

- ▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
- ▼「近作柳樽」は全家の雜吟を募る
- ▼「川柳塔」への投句は同人に限る。
- ▼各地會報は半紙判の原稿紙に清記の事。
- ▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に詰める事。
- ▼書體はなるべく楷書川柳雜誌原稿」と封筒に朱記する事。
- ▼締切は嚴守されたし。
- ▼投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

## 募 集

### 第十一卷第七號課題

五月五日締切

(各題十句以内)

#### ▼團扇

阿部 困 生選

#### ▼涼臺

喜多 春秋共  
姫田 夕 鐘選

### 第十一卷第八號課題

六月五日締切

(各題十句以内)

#### ▼盆踊

高橋 かほる選

#### ▼白服

日野 華 水選

### 每號募集

#### ▼近作柳樽

(千句) 麻生 路 郎選

#### ▼各地柳壇

(會報)

#### ▼文章(評論研究感想吟行漫文)

### 社 告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

### 定 價

- 一 部 金 拾 錢
- 半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
- 壹箇年前金(特輯號共)參圓六拾錢

### 廣 告 料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在にでも頂ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和九年 四月廿五日印刷

昭和九年 五月 一日發行

第十一卷 第五號 (毎月一回一日發行)

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

編輯兼發行印刷人 麻生 幸 一郎

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

發行所 川柳雜誌社

電話天下茶屋二五七九番

大阪市住吉區平野西之町八三番地

電話大阪七五〇五〇番

振替大阪七五〇五〇番  
電話天王寺一六七番

無 斷 禁 載

### 寶 棚 書 店

- (大阪) 大寶棚二盛社書店、(明文堂 其他 市内各書店)
- (東京) 仲見世 玉森堂 (神戸) 米田、寶文館 (函館) 石塚
- (京都) 三宅 (名古屋) 靜觀堂

# 川柳雜誌案内

六號活字十四字組三行金五十錢、一冊用すこ  
ご也、金十錢、句會案内、柳書廣告、その他  
取願、修願、句會案内、柳書廣告、その他

## 並製合本特賣

「川柳雜誌」の合本第二卷  
より十卷まで

各巻巻 金壹圓五十錢  
大阪市内送料 壹册六錢  
市外送送料 壹册廿四錢

大阪市住吉區平野西之町八三  
申込所 川柳雜誌社

## 懸賞川柳募集

題「鈴」路郎 選  
五月十日締切

その他種吟を募る

▼用紙 官製ハガキ (化粧柳  
壇と明記の事)

▼賞品 秀逸數句薄謝を呈す  
授吟所

大阪市玉出本通三の三六  
麻生路郎氏宛

化粧新聞社

# 川柳まやり

菊判每號七十數頁

毎月一日發行一部廿五錢

東京淺草區小島町二の二七

川柳まやり吟社  
(取次所) 川柳雜誌社事務所

## 蒐集

▼新聞、雜誌(川柳の雜)に  
掲載ある川柳に關する記  
事の「切抜」

▼川柳家の集合寫眞、個人  
寫眞

▼川柳の短冊、色紙

右の品で不要なものあれば御  
贈與下さい

大阪市住吉區平野西之町八三  
橋本 綠 雨

川柳懸賞大募集  
旅行新聞課題「旅」 五句  
遊覽課題「温泉」 五句  
鋪道課題「晚酌」 五句

○投吟用紙官製ハガキ(表面  
へ雜誌名記入)  
○發表誌御望の方は各雜誌  
一冊に付二錢切手六枚添付  
のこと

五月十五日嚴守

賞品 各雜誌共賞金賞品澤山

投吟所 愛知縣祖父江町三三  
加藤 文 醉 宛

川柳雜誌投句用箋

本社制規の投句用箋は左の價額  
でお頒ち致します。なるべく此  
用箋を御使用下さい。

五〇枚綴二冊 價金拾二錢  
(送料共)

御申込は本社事務所宛  
(一錢切手代用可)

診察 午前九時ヨリ  
時間 午後十時マデ  
第一第三 日曜午後休診

# 花柳病科

大阪市西區梅本町三七  
本田 外科 醫院  
電話西五〇九四

診療 午前九時  
時間 午後五時  
入院隨時  
日曜祭日午後休診

# 肛門病科

大阪市東區船橋町四三  
大阪久枝肛門病院  
電話南六八六

# 清 酒

白鶴禮讚

白鶴の瓶たまることたまること  
 白鶴へみんな揃ふたい、話  
 い、酒と言へば白鶴持つてくる  
 白鶴を一本つけてからの事  
 百事意の如く白鶴呑んでゐる  
 當選に白鶴樽のままて来る  
 貧乏の中に白鶴だけの味

攝津灘

嘉納合名會社釀





我社は本邦最大の  
の生命保險會社  
にして、基礎最  
も鞏固、保險料  
低廉、約款優秀

加入者配當多額  
の保險を提供し  
て偏に江湖の稱  
讃を博す。

# 日本生命

大坂市東區今橋四丁目